西部開発事業(畑地帯総合土地改良事業)

—緊急発掘調査報告—

高遠道・井の久保・表木原遺跡

1981

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

西部開発事業(畑地帯総合土地改良事業)

ー緊急発掘調査報告ー

高遠道・井の久保・表木原遺跡

1981

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

北から小黒川，戸沢川，小戸沢川，犬田切川，猪ノ沢川，藤沢川，堂沢川，大沢川等々の大小様々な諸河川が西から東へ流れて天竜川に合流する伊那市西春近地籍は，極めて，複雑多岐にわたる自然的条件に恵まれています。前述した大小諸河川によって形成された谷及び河岸段丘面は風光明媚な様相を呈し，四季を通じて，各々の季節感を自然に即した姿で地区住民にうったえてくれます。

このような状況下でありますので，悠久の太古から人類文化が繁栄した数多くの埋蔵文化財が存在しており，伊那市内では地区別では最も埋蔵文化財の多い地域の一つとなっております。

しかしながら西春近地区が近代農村地区として発展していくために，時代に即した農業経営に順応していくことがまず要請されるようになってきました。

その根本的な改革は大規模な区画を実施し，大型機械化の導入を計るいわゆる西部開発事業が施行されたのであります。この事業とともに過去数千年の間地中に埋蔵されていた我々の遠き先祖達の文化遺産が破壊されるということで過去10年近くにわたって緊急発掘調査を実施してまいりました。

当事業のなかで昭和55年度には高遠道遺跡，井の久保遺跡，表木原遺跡の発掘調査を実施しました。それぞれの遺跡発掘調査の成果についてはこの報告書のなかに記載してあります。

この報告書がこれらの遺跡の性格や特質を永久に記録し，今後考古学の基礎資料として役立つことを願ってやみません。

終わりに，この事業について再三ご配慮を賜った南信土地改良事務所ならびに県教育委員会，そして発掘調査に携わり幾多の困難を克服して本目的を完遂された多くの関係者各位の労に対し謝意と敬意を表するものであります。

昭和56年３月10日

伊那市教育委員会

教育長　伊沢　一雄

まえがき（高遠道・井の久保・表木原遺跡）

位　　置

高遠道遺跡は長野県伊那市西春近諏訪形と井の久保にまたがって展開している。井の久保遺跡は西春近井の久保，表木原遺跡は西春近表木に位置している。

遺跡地に至るまでの道順は飯田線赤木駅で下車して，国道153号線を北へ向かって200 m程行くと，左手に西春近南小学校の真新しい校舎が見える。学校からさらに北へ100 m程行くと左手に藤野屋商店があり，この商店と道をへだてた東側が表木原遺跡である。

高遠道遺跡は前述した藤野屋商店のすぐ北側の道路を左折して西へ300 m程行った一帯に遺跡地の集中地点がある。井の久保遺跡は藤野屋商店をさらに北へ国道153号線を500m程下って行くと，伊那バス井の久保停留所があり，この停留所付近を左折して登り坂の道路を西へ100 mほど行くと，発掘地点に着く。この地点は藤沢川左岸河岸段丘面上の突端部に位置している。

現況は表木原遺跡は大部分が水田に，高遠道遺跡と井の久保遺跡は大部分が畑にそれぞれ利用されている。

地形・地質

西春近中・南部地区は犬田切川より南の部落で，言うならば沢渡が最も妥当な区分の仕方であろう。この地区は天竜川が最も低い面を北から南に流れ，その支流である大小河川によって，この地区の地形・地質が形成されていると言っても過言ではない。天竜川の支流である大小河川を北から列記してみると次のようになる。犬田切川，猪ノ沢川，前沢川，大洞，藤沢川，堂沢川，大沢川である。

大小河川について述べてみることにする。これについては上伊那誌『自然篇陸水』によると次のように記述されている。『犬田切川は西春近権現山の南の谷を直線的に流れて，沢渡で天竜川に注いでいる。全長約6㎞，谷川で洪水に急速に出水して下流部は荒廃がはなはだしい。』『藤沢川は宮田村オツ越附近の沢の湧水を集め，西春近下小出において天竜川に合流している。全長約6.8㎞，雨期には土砂の流出がはなはだしい。』

猪ノ沢川は権現山麓の南の沢を蛇行状に流れ，南丘部落の南を流れ，沢渡と柳沢入口付近で天竜川に合流する。全長約6㎞，普段は水量が少なく，一度，雨が降り出すと荒れ川に変化し，ところどころに砂防ダムがつくられている。前沢川は物見や城付近より流れ出し，柳沢部落の北側を流れ，同部落の東の位置で藤沢川と合流する。その全長は約3㎞である。大洞の源は前沢川のそれよりも南側にあり，柳沢部落の南側を流れ，同部落の東はずれで藤沢川と合流する。前沢川も大洞も普段は水量は少ないが，降水が長時間続いた時は川の源の付近の水が集中的になるので思いもよらぬほどの荒川へと変化する。

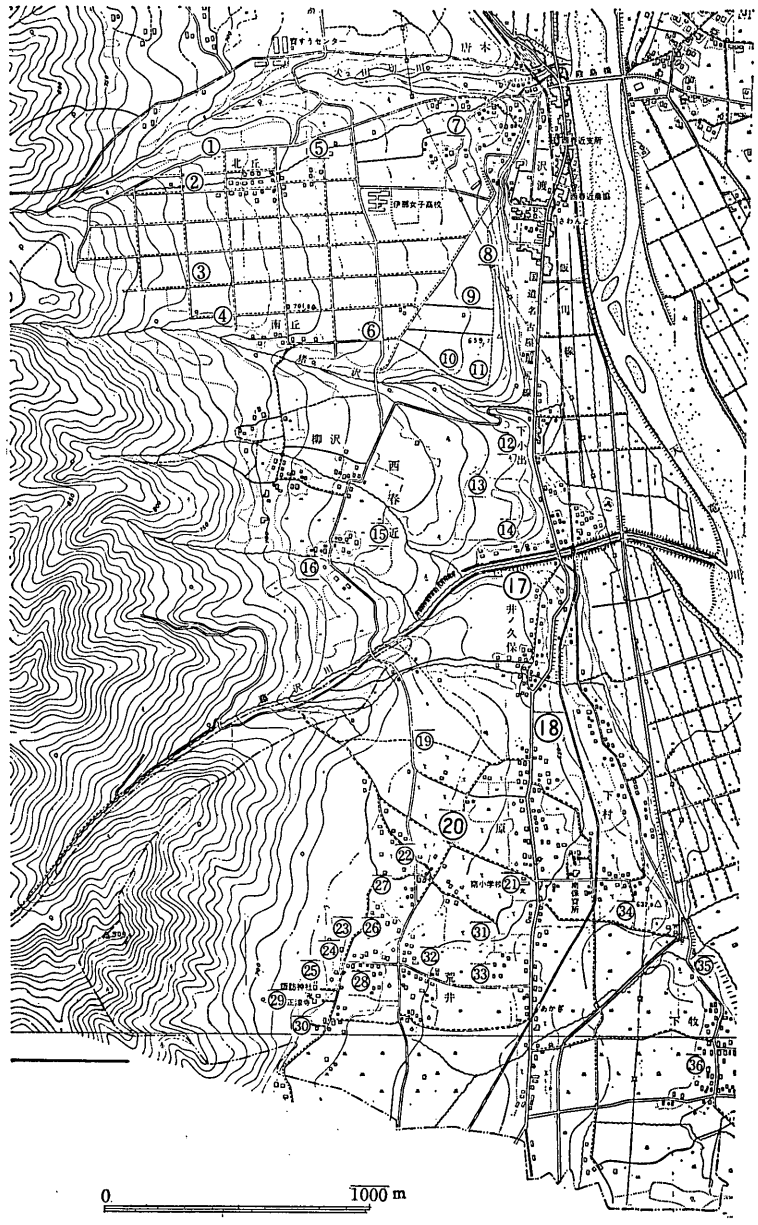
堂沢川は宮田村北割付近山麓にその源を発し，全長は約7㎞ほどを流れ，天竜川と合流する。途

中，諏訪形，赤木，下牧部落をうるおしている。以上述べてきた小河川は天竜川と合流する付近は解析地形が進み，高い河岸段丘を形成している。

湧水は小河川の段丘崖面に豊富にみられ，この水を利用して，ワサビ栽培が行われている。

遺跡の名称

①北　丘　B　②北　丘　A
③南　丘　B　④南　丘　A
⑤北　丘　C　⑥南　丘　C
⑦眼　子　田　原　⑧山　の　神
⑨上　の　塚　⑩沢　渡　南　原
⑪下　小　出　平　⑫天　伯
⑬下　小　出　原　⑭天　伯　原
⑮東　田　⑯南　村
⑰井　の　久　保　⑱表　木　原
⑲山　の　下　**⑳高　遠　道**
㉑西春近南小学校付近　㉒鳥　井　田
㉓菖　蒲　沢　㉔富士塚古墳
㉕富　士　山　下　㉖広　垣　外　Ⅰ
㉗広　垣　外　Ⅱ　㉘宮　入　口
㉙和　手　㉚上　手　南
㉛城　の　腰　㉜安　岡　城
㉝横　吹　㉞寺　村
㉟下　牧　経　塚　㊱下　牧



位置及び西春近中・南部地区遺跡分布図

歴史的環境

位置及び西春近中・南部地区には現在36か所の遺跡が確認されている。36か所を時期別分類をしてみよう。北丘Ｂ遺跡は縄文早・中・後期。北丘Ａ遺跡は縄文中期,奈良。北丘Ｃ遺跡は縄文中期。南丘Ｂ遺跡は縄文中期，奈良。南丘Ａ遺跡は旧石器，縄文中期，弥生後期，奈良，平安。南丘Ｃ遺跡は縄文中期。眼子田原遺跡は縄文中期，奈良。山の神遺跡は縄文中期,奈良。上の塚遺跡は奈良，中世。沢渡南原遺跡は縄文中期。下小出平遺跡は縄文中期，奈良。天伯原遺跡は縄文中期，奈良，平安。南村遺跡は縄文前・中期，奈良，平安。東田遺跡は縄文中期，平安，中世。天伯遺跡は縄文中・後期。下小出原遺跡は縄文中期，奈良，平安。井の久保遺跡は縄文中期・後期。表木原遺跡は縄文中期，奈良，平安。山の下遺跡は縄文中期，奈良。菖蒲沢遺跡は旧石器，縄文早・中・後・晩期，奈良，平安，中世。富士山下遺跡は縄文中期，弥生後期，奈良。富士塚は横穴式石室，奈良。広垣外Ⅰ遺跡は縄文中期，奈良。広垣外Ⅱ遺跡は奈良，平安。鳥井田遺跡は縄文中期，奈良，平安。高遠道遺跡は縄文中期，奈良，平安。西春近南小学校付近遺跡は奈良。安岡城遺跡は縄文中期，奈良，平安，中世。城の腰遺跡は縄文中期，奈良，平安。横吹遺跡は縄文中期，奈良，平安。和手遺跡は縄文中期，奈良，平安，中世。上手南遺跡は奈良，平安。宮入口遺跡は縄文中期，奈良。寺村遺跡は縄文中期，奈良。下牧遺跡は縄文早・中期。下牧経塚は(平安末から鎌倉の)経塚遺跡である。

今までに，何かの事業によって発掘調査を実施した遺跡は下記のとおりである。

中央道関係では北丘Ｂ遺跡，北丘Ａ遺跡，南丘Ａ遺跡，南丘Ｃ遺跡，菖蒲沢遺跡，富士山下遺跡，富士塚古墳である。

養蚕団地事業としては，菖蒲沢遺跡がある。大規模農道として南丘Ｃ遺跡がある。土地改良事業としては眼子田原遺跡，南村遺跡，東田遺跡，山の下遺跡，菖蒲沢遺跡，今回の高遠道遺跡，井の久保遺跡，表木原遺跡がある。

高遠道遺跡は前に述べたように西春近諏訪形に位置し，この地は江戸時代高遠藩春近郷の一部であり，したがって高遠へ行くのに利用したので俗称高遠道と呼んでいたのであろう。この名は時代がたつにつれていつしか固有名詞化したのであろう。

井の久保遺跡付近に山伏塚と呼ばれている場所がある。山伏とは山岳神仏を念じ，荒修行を行い，神仏混合の原始的な宗教のようなものである。悪魔退散，病気平癒，幸福招来，家内安全等々の御祈禱を行いながら，各地をわたり歩き，生活をしていた。当初はこのような意味あいをもっていたが，時代が経るにしたがって本来の意味とは異なった形となっていった。江戸時代にいたってはまったくといっていい程本来の意味は失われてしまって，行き倒れの旅人を葬った無縁塚へと形を変えていった。各地に残れる何々塚とは前述した山伏塚と同じような形態のものである。

表木原遺跡はすぐ東側の天竜川第二河岸段丘面の突端部に表木城と言われる中世城館跡がある。この城館跡については古く伊那武鑑根元記があり，それによると次のように記されている。『表木主膳ハ拾八貫文ヲ領シテ仝村表木ニ住ス共ニ小出犬房丸ノ末孫ニテ世々高遠城ニ属シ天正年中仝氏ノトキ家名ヲ失ヒ其跡年貢地トナリ』

（飯塚政美）

凡　　例

1　今回の発掘調査は西部開発事業に伴う，土地改良事業で，第８次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

2　この調査は，県営畑地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘で，国，県，市の補助金のもとに，事業は長野県南信土地改良事務所の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3　本調査は，昭和55年度中に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし，資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。

4　本文執筆者は，次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美

◎図版作製者

○遺構・遺物及び地形

飯塚政美，小木曽清

○陶器・石器実測

小平和夫，小木曽清

◎写真撮影

○発掘及び遺構・遺物

飯塚政美，小木曽清

5　本報告書の編集は主として，伊那市教育委員会があたった。

6　出土遺物は伊那市考古資料館に保管されている。

高遠道遺跡

目　　次

序
目　　次……（1）
挿図目次……（2）
表 目 次……（2）
図版目次……（2）

第Ⅰ章　発掘調査の経過……（3）

第1節　発掘調査の経緯……（3）
第2節　調査の組織……（3）
第3節　発掘日誌……（4）

第Ⅱ章　層　　序……（6）

第Ⅲ章　遺　　構……（7）

第1節　ロームマウンド……（8）

第Ⅳ章　遺　　物……（9）

第1節　土器・陶器……（9）
第2節　石器……（9）

第Ⅴ章　ま と め……（11）

挿 図 目 次

第1図　地 層 図……（6）
第2図　地形及び遺構配置図……（7）
第3図　第1号ロームマウンド実測図……（8）
第4図　第2号ロームマウンド実測図……（9）
第5図　石器実測図……（10）

表　目　次

第1表　伊那市内ロームマウンド一覧表……（12）

図 版 目 次

図版1　遺跡全景
図版2　遺　　構
図版3　遺物出土状況
図版4　出土遺物

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島，東方部落，昭和49年度の東方，村岡，城，山本部落にわたって行われてきました。昭和51年度は沢渡の上段（小字名で言う眼子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出，宮の原，中村部落にかけて行われました。昭和53年度は柳沢，白沢，南小出部落が，昭和54年度は諏訪形区，昭和55年度は諏訪形と井の久保にまたがる高遠道遺跡，井の久保の井の久保遺跡，表木の表木原遺跡の三遺跡が該当しました。

発掘着工以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では，その件について承諾しましたので，市教育委員会を中心に，高遠道遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を行うことにしました。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第２節　調査の組織

高遠道遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽映士	伊那市教育委員会委員長
〃	向山辻雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	三沢昭吾	伊那市教育委員会教育次長
〃	石倉俊彦	〃　社会教育課長
〃	柳沢一男	〃　〃　課長補佐
〃	武田則昭	〃　社会教育係長
〃	沖村喜久江	〃　社会教育課主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	飯塚政美	〃

調査員	福沢幸一	長野県考古学会会員
〃	田畑辰雄	〃
〃	小木曽清	宮田村考古学友の会会長
〃	春日徳明	大正大学学生
〃	小平和夫	長野県考古学会会員

第3節　発掘日誌

昭和55年9月29日　西箕輪羽広にある伊那考古資料館で発掘器材の整備を実施する。

昭和55年9月30日　前日同様に考古資料館で発掘器材の整備や員数の点検を行う。明日発掘器材の運搬がスムーズに実施できるようにきちんと整頓しておく。

昭和55年10月1日　午前中に高遠道遺跡発掘現場は10年位荒してあったとみえて，あたり一面にふじづるや茅が茂っており，まさにジャングルのような様相を呈していた。このような状態ではすぐに発掘調査にかかれないので，まず草刈りより実施する。午後，考古資料館より発掘器材を現場へ運搬する。

昭和55年10月2日　本日は仕事の内容を二つに分ける。一班は昨日運搬してきた発掘器材の整理やテントを建てる。もう一班は草刈りを実施する。

昭和55年10月3日　昨日切り倒した草のあとかたづけをする。草は刈り倒した時はかなりの重量であったが，一日干しておくと，びっくりする程軽くなっていた。草刈りをさらに北，西へと伸ばしていく。

発掘風景

昭和55年10月4日　本日で発掘予定地の草刈りは全部終了する。刈り取った草は発掘調査がしやすいように西，北，東の畑及び山林の境界線上に積み上げておく。

昭和55年10月6日　グリット設定を行う。グリットは2m×2mで，その名称を南から北へ1～27，東から西へA～N，とする。遺跡地は荒れていたので，グリット棒を打ち込むのに至難であった。

昭和55年10月8日　グリットの掘り下げをA1より実施する。本日，掘った地区は茅の根がグリット全面に覆っていたので，2人の作業員で1日に1グリット掘るのが精一杯であった。

昭和55年10月9日　グリットの掘り下げを実施し，遺構及び遺物の発見はまったくなかった。

昭和55年10月11日　本日もグリット掘りをつづける。少量の遺物出土はみられたが，遺構は何も検出されなかった。

昭和55年10月14日　グリットを東から西へと進めていくと西側の畑との境界線近くにロームマウンドが発見され，これを第1号ロームマウンドとする。東側の山林との境界線近くに同様にロームマウンドが発見され，これを第2号ロームマウンドとする。

昭和55年10月15日　第2号ロームマウンドの西側の1グリットを地層調査のため岩盤まで掘り下げを実施する。第1号ロームマウンドと，第2号ロームマウンドのプラン確認につとめるため，附近一帯を拡張する。

昭和55年10月16日　第1号ロームマウンド，第2号ロームマウンドの掘り下げを開始する。地層調査の掘り下げを実施する。

昭和55年10月17日　第1号ロームマウンド，第2号ロームマウンドの完掘を終了し，写真撮影を終わる。地層調査は岩盤まで掘り下げを終了する。

昭和55年10月18日　第1号ロームマウンド，第2号ロームマウンドの実測を終了する。地層の断面図作製を終了する。第1号ロームマウンド，第2号ロームマウンドのカットを終了し，写真撮影を済ませる。

昭和55年10月22日　第1号，第2号ロームマウンドの断面図作製，全測図の作製

昭和55年10月23日　本日をもって発掘調査を終了し，テントをこわし，あとかたづけをする。

（飯塚政美）

作業員名簿

池上大二，赤羽幸寿，唐木淳，吉原さかゑ，酒井岩夫，工藤りよ子，後藤重美，登内政光，小池八重子，大野田三千代，平沢八千子，白鳥あき子，酒井とし子，東野広次，北沢武雄，百沢乙平，太田利雄，酒井蔦恵，保科義重

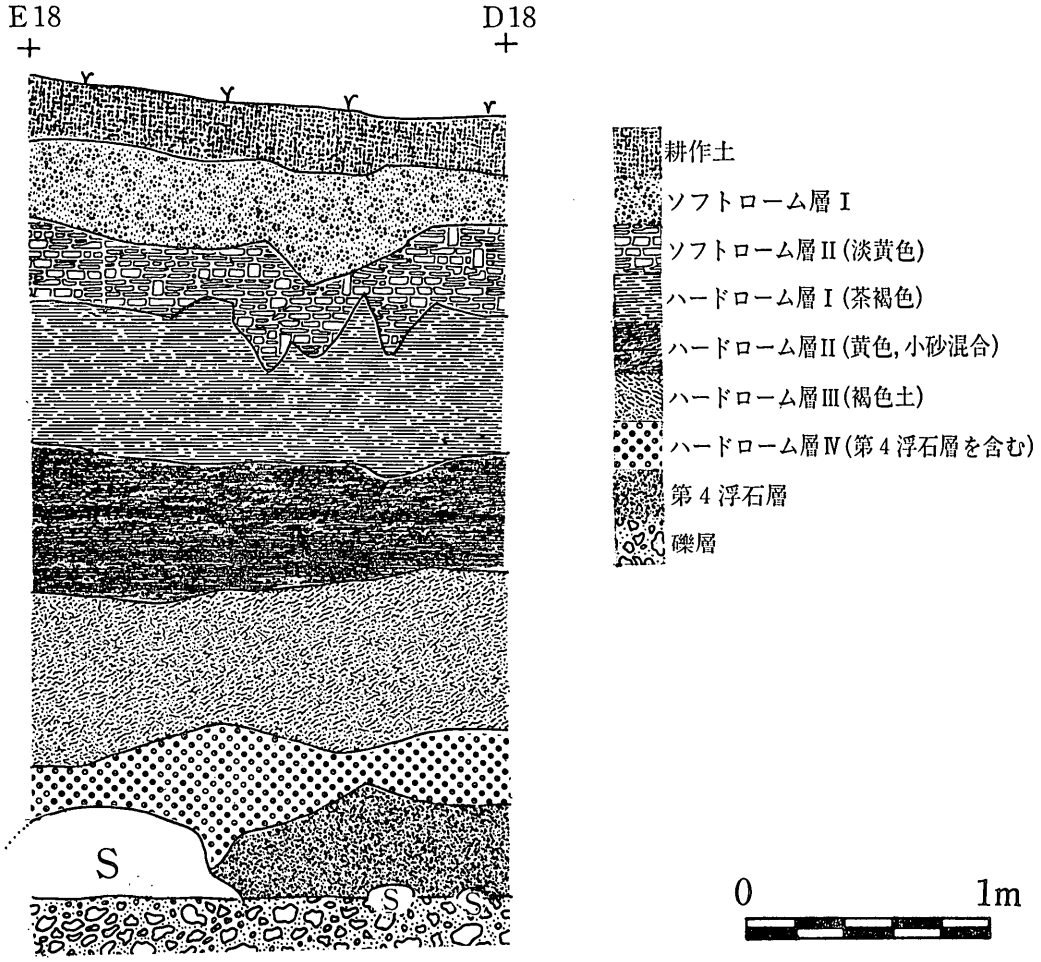
（敬称略順不同）

第Ⅱ章　層　　序

高遠道遺跡の層序関係は第1図地層図のようである。地層の堆積層序は表土面から礫層までには9枚の層より成り立っていた。

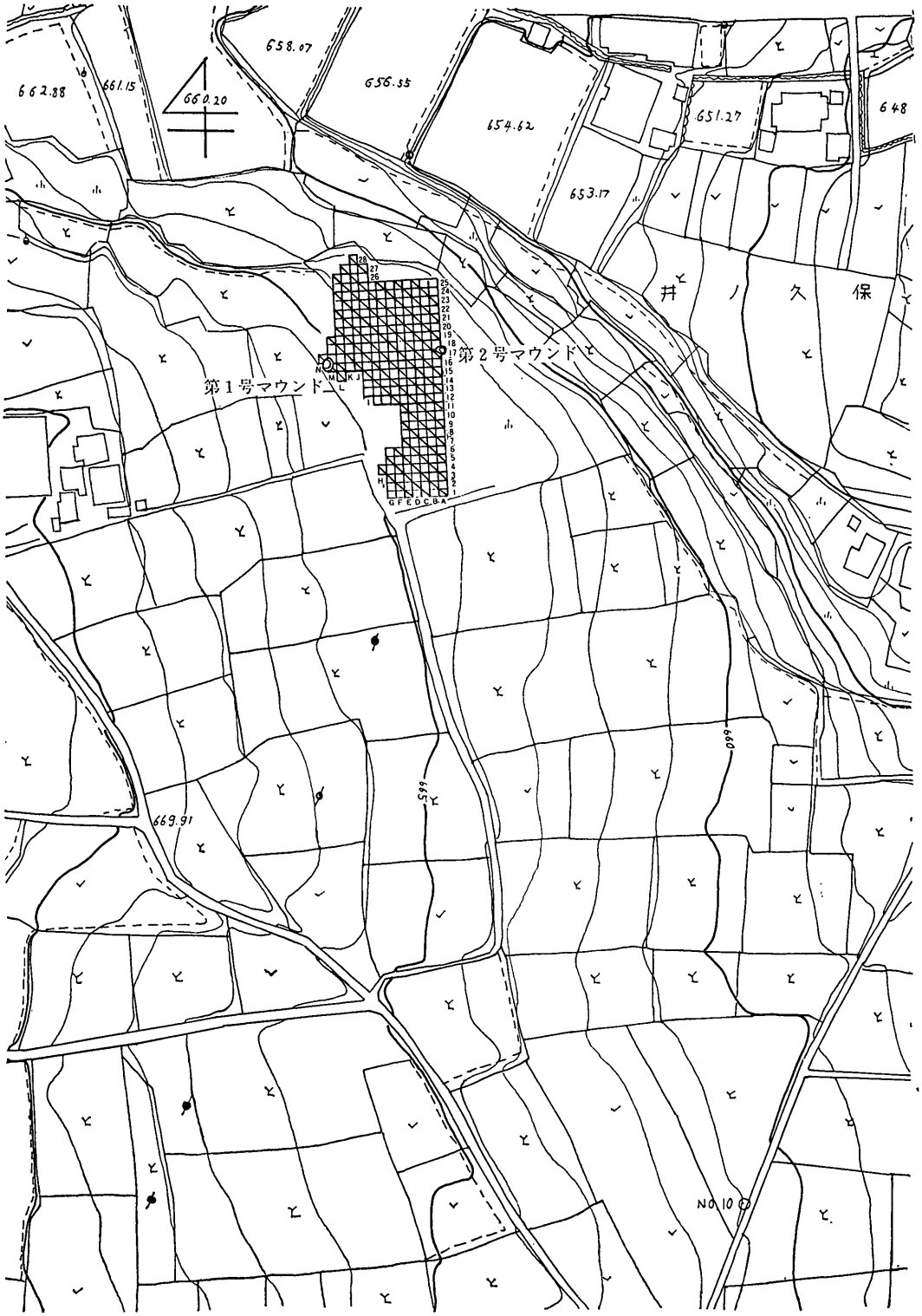
9層を上から順々に列記すると次のようである。耕作土，ソフトローム層Ⅰ，ソフトローム層Ⅱ（褐色土，淡黄色），ハードローム層（茶褐色），ハードローム層（黄色，小砂混合），ハードローム層（褐色土），ハードローム層（第4浮石層を含む），第4浮石層，礫層であった。

礫層は花崗岩が大部分であり，藤沢川に産する花崗岩と同質のものであり，第4浮石層の一般的な年代測定からすれば，層序関係からしてみるに，約27,800±500年と思われる。



第1図　地　層　図

第Ⅲ章 遺　構



第2図　地形及び遺構配置図

第1節　ロームマウンド

第1号ロームマウンド（第3図，図版2）

本ロームマウンドは発掘調査地区の西側の方に他の畑と境界線を接して検出された。この遺構の広がっている範囲をグリット名で記してみると次のようである。　M16，N16，M17，N17，

規模は南北3m25cm程，東西1m75cm位を測り，平面プランは南北に長い長楕円形を呈している。南西の一角は発掘調査予定用地外であったために発掘調査は不可能であった。

マウンドの東側は溝がきれいにまわっており，マウンドによくみられる溝状遺構のような形態を成していた。西側の用地外も全面発掘を実施したならば，おそらく溝は全周していると推定できると思われる。

ロームマウンドの表面はかたくたたかれており，若干凹凸が認められた。マウンドの土層は上から耕作土，褐色土，薄黒褐色土，濃褐色土，淡黒褐色土，ローム層の順に堆積していた。溝のなかへは淡黒褐色土が充満し，この土層のなかに，少量の炭化物が認められた。

遺物の出土は何もなく，したがって時代決定は不可能であった。

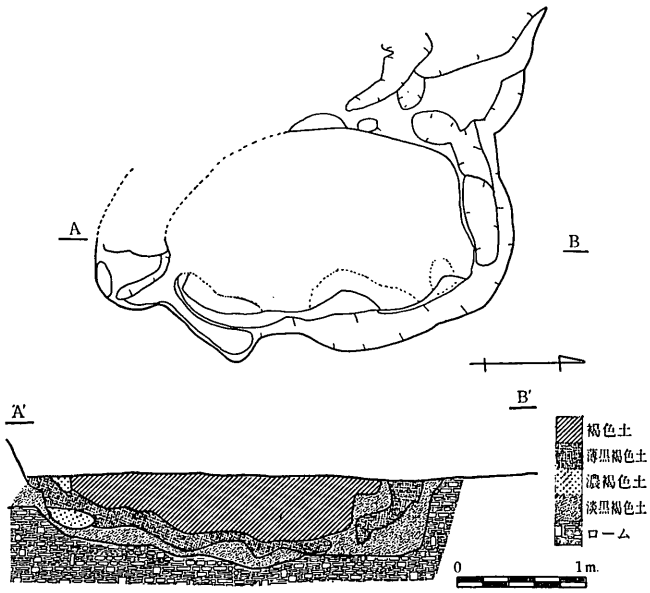
第2号ロームマウンド（第4図，図版2）

本遺構は表土面より30～40cm位下ったローム層面中に構築されたロームマウンドであり，遺構の検出されたグリット名は次のようである。

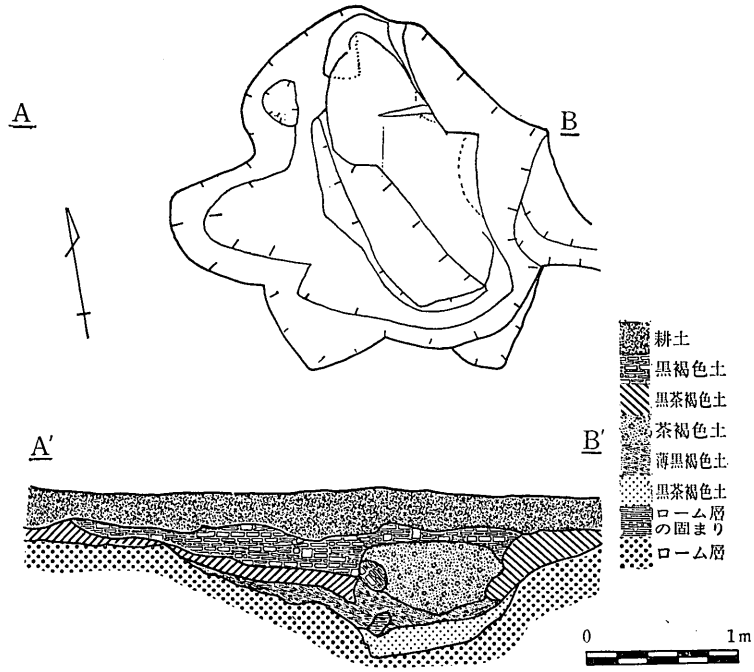
A17，A18　南北2m35cm，東西2m80cm程の規模を有し，平面プランは若干角張っている。マウンドの周囲には溝が全周していた。

ロームマウンドの表面は若干凹凸があり，かたくたたかれていた。この遺構の層序関係は上から耕作土，黒褐色土，黒茶褐色土，茶褐色土，薄黒褐色土，黒茶褐色土，ロームの固まり，ローム層の順で堆積していた。

遺物は細かな土師器片の出土が認められたが，即，これを本遺構の時代決定には疑問が残る。したがって時代は不明と考えた方が妥当と思われる。以上，二基のロームマウンドを述べてきたが，その内容及び性格について，何の手掛かりも得られなかった。依然として本遺構は一般的に考えられている墓壙と決めるわけにはいかない。



第3図　第1号ロームマウンド実測図



第4図　第2号ロームマウンド実測図

第Ⅳ章　遺　　物

第1節　土器・陶器

今回の発掘では土器・陶器については見るべきものはなかった。土器としてはわずかに土師器の破片が数片だけであった。また図をとるだけのものではなかったので，今回は割愛させていただいた。

陶器は全部で6片出土したが，全て江戸時代に位置づけられる。この6片は後の図版3の中に登載してある。

第2節　石　　器

本遺跡で今回の発掘調査によって出土した石器は第5図に登載してある5点である。この5点は全て打製石斧であり，さらにそれを細分した形態は短冊形(1)，撥形（2～5）であった。石質は5点全て硬砂岩を利用してあった。5点は全てグリット内出土

(1)は表裏面ともに大部分自然面を残しており，右側縁に沿ってはきれいな剝離整形がなされている。

(2)は表裏面の9割がたに自然面が残されている。現存している器形からして素材は楕円形の偏平

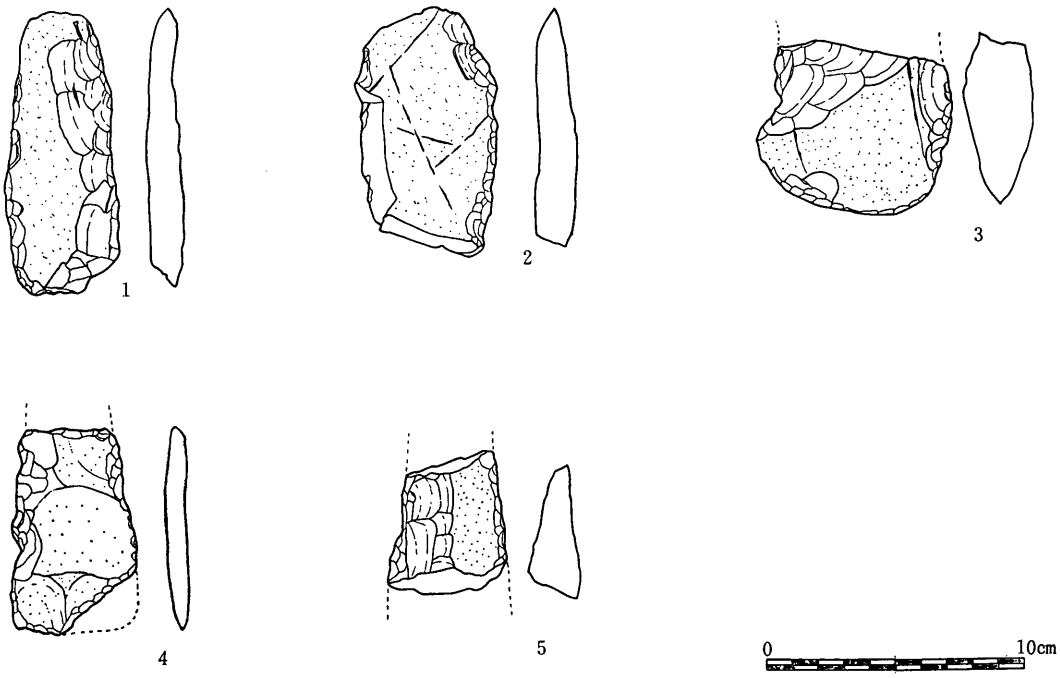
礫であったことが推定できる。下端部は磨切り状になっていた。

(3)は上端部が欠損してしまっている。完全であれば現存している形態から推定してかなりの重量があったものと思われる。刃部は鋭利に製作されており，伐採に用いられたものと推測できよう。

(4)は上部と下端部の右側が欠損している。極めて扁平であって，石斧としては剝離が雑である。

(5)は上部，下部ともに欠損しており，幅が狭く，それに比して厚みのある形態をとっている。

（飯塚政美）



第５図　石器実測図

第V章 ま と め

土地改良事業地区内で最も地表面の変動が大きいところを選んで，また，そのなかでも地形的にみて，遺跡地として有力でありそうな場所を発掘調査地区に決めた。他の場所はあまり地表面を変えないということであったので，遺跡本来の保存方法からしてみて，そのままにしておいた。

従って，限られた用地内の発掘調査であったために期待していたような成果はあがらなかった。遺構としては，わずかに2基のロームマウンドの検出だけに終わってしまった。

第1号ロームマウンドは3m25cm×1m75cmの規模で，長楕円形のプランを呈し，周囲に溝状の遺構がみられた。マウンド内の土層は人為的な構築物にみられるように中間に黒味がかった土の混入がみとめられた。

第2号ロームマウンドは2m35cm×2m80cmの規模で，若干角張り状のプランを成していた。

第1号ロームマウンド同様，周囲に溝が回っていた。ロームマウンド内への流入土層は人為的な跡がうかがえるように，中間層に黒味がかった土が入り込んでいた。

双方のロームマウンドとも時代決定になるような遺物の出土は何もみられなかった。

遺物は土師器の破片が数片出土しただけであった。他に，江戸時代の陶器6片が出土した。この発掘した附近の小字名は山伏塚と呼ばれている点からして，その塚となんらかの関係があるものと思われる。

伊那市内で，いままでに検出されたロームマウンドを別頁第2表にしてまとめておいたので参考にして下さい。

最後に，この発掘調査に御協力下さった長野県教育委員会文化課指導主事関孝一氏，南信土地改良事務所職員一同，調査団の諸先生並びに作業員各位に対し深甚なる感謝をいたす次第であります。

（飯塚政美）

第1表 伊那市内ロームマウンド一覧表

住所	遺跡名	マウンド番号	プラン	規模(m) 南北	規模(m) 東西	規模(m) 高さ	比定時期	備考
西春近諏訪形 7816—2—3	富士山下	1 号	三角形 円形	1.70 径1.50	0.90	2.00	不詳	ローム・ローム混り褐色土・褐色土・ローム混り黒色土，黒色土の地層層序
	〃	2 〃	方形	2.00 2.00	2.00 3.00	不明	不詳	方形のものは，1mの深さ30cmほどの壙をつけている。
	〃	3 〃	楕円形	2.00	1.25	0.30	不詳	北側を2.70m深さ1.40mの壙状にくぼめてある。
	〃	4 〃	楕円形	1.40	0.80	不明	不詳	北側に1.30×0.60，深さ0.30mほどの壙をもつ。奈良時代住居址の北隣
西春近諏訪形	菖蒲沢	1 号	楕円形	1.60	2.40	1.10	縄文中期	南下に1号住居址があり，溝中より加曽利E式土器片が少量出土
	〃	2 〃	楕円形	1.90	2.70	0.52	縄文中期	北側の溝内の砂礫に混って縄文中期加曽利E式の土器片が出土
西春近中村・下島	中村	1 号	不整形	1.95	1.50	不明	縄文前期終末	西側と東側に溝が回っているが，その中より，多量の炭化物が出土
西春近東方	東方A	1 号	方形	1.40	3.50	0.30 ～0.55	不詳	形成土は大部分がソフトロームで，なかにブロック状に黒色土やハードロームが混じる。
	〃	2 〃	不整形	0.60	2.70	0.20 ～0.40	不詳	覆土中より多量の炭化物が出土
西箕輪与地	与地原	1 号	隅丸方形	2.25	2.70	0.20 ～0.70	不詳	形成土は大部分がソフトロームであり，なかにブロック状に黒色土やハードロームが混入
伊那平沢	丸山清水	1 号	不整形	1.50	0.80	0.20	不詳	中央部の頂部は若干凹む傾向，11号住居址の南側に位置する。
伊那小黒原 7227—7545	城楽	土壙マウンド	楕円形	1.50	3.50	0.24	不詳	ロームを混じて細礫を含む黄褐色土のマウンド，3号土壙の南

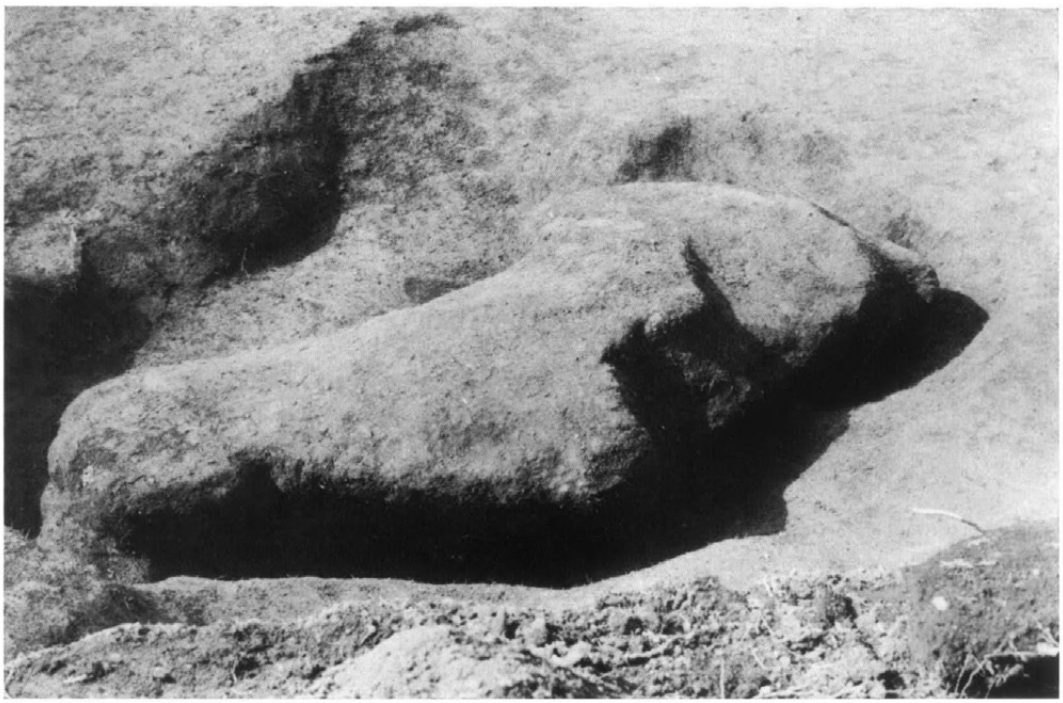
図　　版

図版一　遺跡全景

遺跡地遠景（南側より眺む）

遺跡地近景（南側より眺む）

第１号ロームマウンド

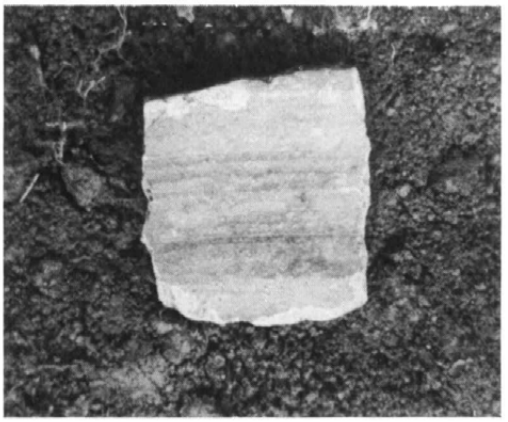


第２号ロームマウンド

図版三　遺物出土状況

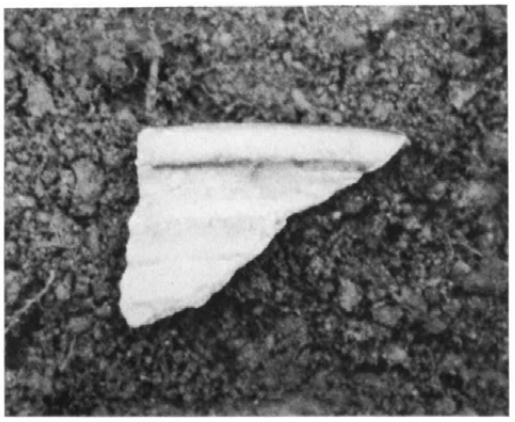
陶　　器

陶　　器

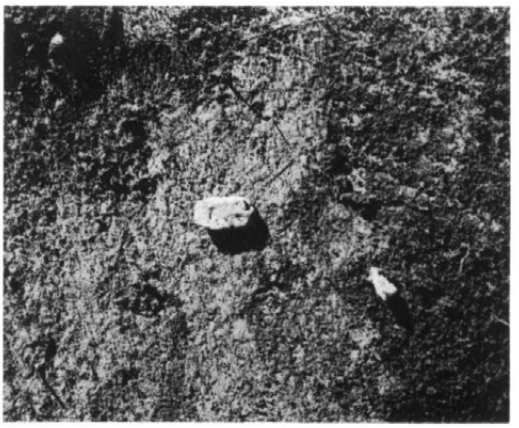


陶　　器

陶　　器



陶　　器



陶　　器

図版四　出土遺物

石　　器

高遠道遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和56年3月17日　印刷

昭和56年3月20日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　株式会社　ぎょうせい

東京都新宿区西五軒町52

井の久保遺跡

目　　次

目　　次……（1）
挿図目次……（2）
表 目 次……（2）
図版目次……（2）

第Ⅰ章　発掘調査の経過……（3）

第1節　発掘調査の経緯……（3）
第2節　調査の組織……（3）
第3節　発掘日誌……（4）

第Ⅱ章　遺　　構……（5）

第1節　住居址……（6）
第2節　ロームマウンド……（7）
第3節　溝状遺構……（9）

第Ⅲ章　遺　　物……（11）

第1節　土　器・灰釉陶器……（11）
第2節　土製品……（12）
第3節　古　銭……（12）
第4節　金属製品……（13）
第5節　石　器……（13）

第Ⅳ章　ま と め……（15）

挿　図　目　次

第１図　位置及び遺構配置図……（５）
第２図　第１号住居址実測図……（６）
第３図　第１号ロームマウンド実測図……（７）
第４図　第２号ロームマウンド実測図……（８）
第５図　第３号ロームマウンド実測図……（９）
第６図　第４号ロームマウンド実測図……（９）
第７図　第１号溝状遺構実測図……（付図袋中）
第８図　第１号溝状遺構地層図(1)……（10）
第９図　第１号溝状遺構地層図(2)……（10）
第10図　第１号溝状遺構地層図(3)……（10）
第11図　土器拓影……（11）
第12図　土師器・灰釉陶器実測図……（12）
第13図　土製品実測図……（12）
第14図　古銭拓影……（13）
第15図　金属器実測図……（13）
第16図　石器実測図……（14）
第17図　石器実測図……（14）

表　目　次

第１表　伊那市内に於ける平安時代住居址一覧表……（17）

図　版　目　次

図版１　遺跡全景
図版２　遺　　構
図版３　遺　　構
図版４　遺　　構
図版５　遺　　構
図版６　遺物出土状況
図版７　出土遺物
図版８　出土遺物

第Ｉ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島，東方部落，昭和49年度の東方，村岡，城，山本部落にわたって行われてきました。昭和51年度は沢渡の上段（小字名を眼子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出，宮の原，中村部落にかけて行われました。昭和53年度は柳沢，白沢，南小出部落が，昭和54年度は諏訪形区，昭和55年度は諏訪形と井の久保にまたがる高遠道遺跡，井の久保にある井の久保遺跡，表木にある表木原遺跡の三遺跡が該当しました。

発掘着工以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では，その件について承諾しましたので，市教育委員会を中心に，井の久保遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を行うことにしました。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかりました。

第２節　調査の組織

井の久保遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽映土	伊那市教育委員会委員長
〃	向山辻雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	三沢昭吾	伊那市教育委員会教育次長
〃	石倉俊彦	〃　社会教育課長
〃	柳沢一男	〃　〃　課長補佐
〃	武田則昭	〃　社会教育係長
〃	沖村喜久江	〃　社会教育主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	飯塚政美	〃

調　査　員	福　沢　幸　一	長野県考古学会会員
〃	田　畑　辰　雄	〃
〃	小木曽　　清	宮田村考古学友の会会長
〃	春　日　徳　明	大正大学学生
〃	小　平　和　夫	長野県考古学会会員

第3節　発掘日誌

昭和55年10月24日　本日より井の久保遺跡発掘調査にかかる。一方では発掘器材を運搬し，また一方では現場が荒れ畑になっており，雑草が茂っていたので，いそいで，テント建設地だけ草刈りを実施したり，テントがうまく建つように整地を行う。

昭和55年10月27日　昨日に引続いて草刈りとテント設営作業を二手に分れて行う。草はかたづける場所が遠いので，何か所も大きな穴を掘り，そのなかで燃やすことにする。

昭和55年10月28日　グリットの設定を行う。グリットは南から北へ１～35，東から西へＡ～Ｉとする。Ａ１より掘りはじめる。

昭和55年10月29日　Ａ１よりグリットを市松状に掘り下げていくと，集中的にロームマウンドが発見され，それぞれを第１号，第２号，第３号，第４号ロームマウンドと名づける。

昭和55年11月１日　昨日検出された第１～第４号ロームマウンドのプラン確認をし，掘り下げを開始する。グリット掘りを北へ北へと進めていくと，溝状の遺構が発見され，第１号溝状遺構とする。

昭和55年11月４日　第１～第４号ロームマウンドをほぼ完掘し，写真撮影をすませ，実測を終了する。掘り下げていく段階で市内では珍しい有舌尖頭器が出土した。第１号溝状遺構を掘り下げていくと，なかから元祐通宝が出土し，中世の遺構であることが判明した。溝をへだてた北側へグリットを入れると，黒土の落ち込みがみられ，これを第１号住居址とする。

昭和55年11月５日　第１号ロームマウンドから第４号ロームマウンドの断面をとり，写真撮影を終了する。溝状遺構の形態を知るために部分的に掘り下げを実施し，写真撮影を済ませる。第１号住居址のプラン確認と掘り下げの実施。

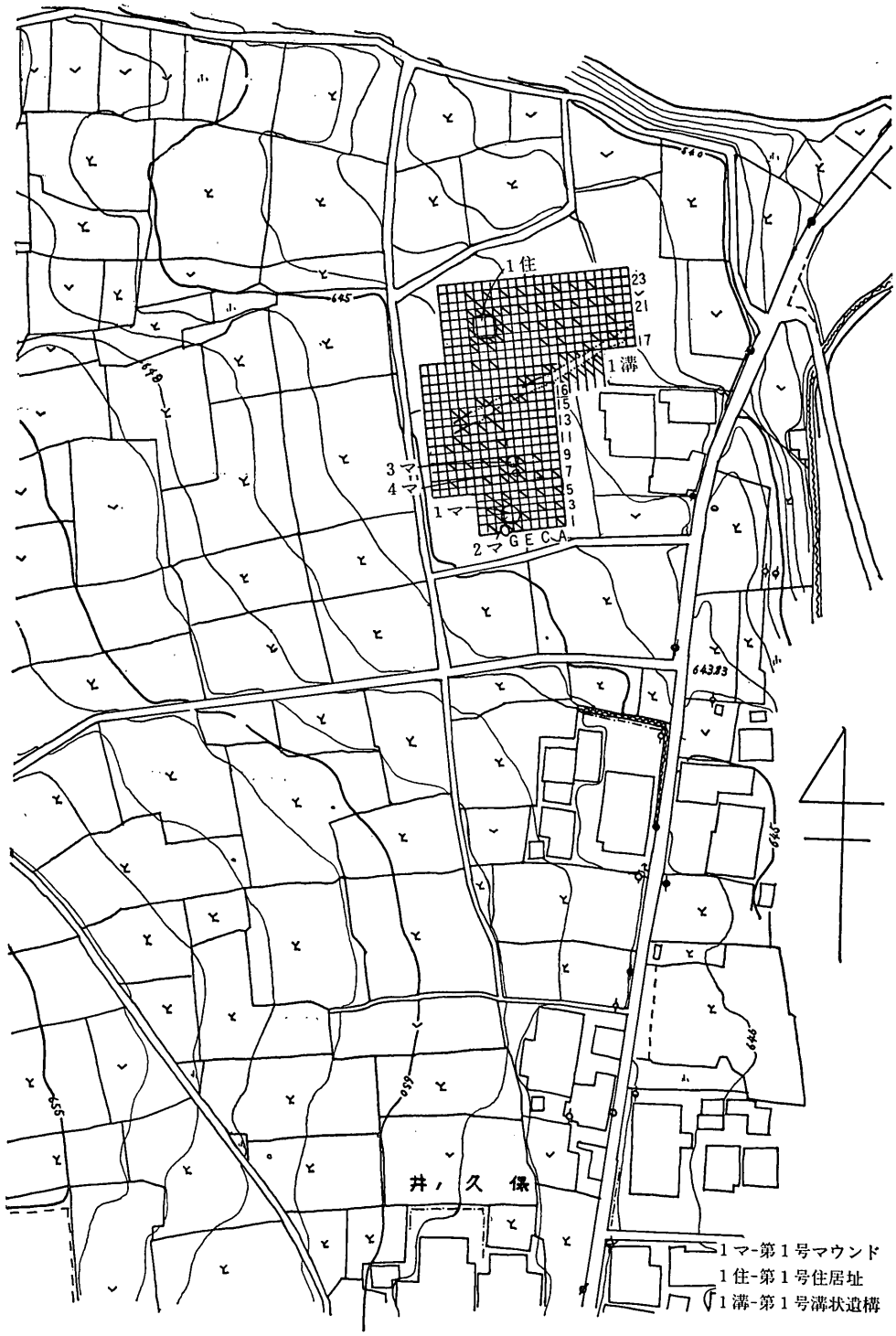
昭和55年11月６日　第１～第４号ロームマウンドの断面実測終了，溝状遺構の実測終了。第１号住居址の完掘及びそれの写真撮影終了。

昭和55年11月７日　第１号住居址の実測，全測図の作製，テントのとりこわし。

（飯塚政美）

発掘風景

第Ⅱ章 遺　構



第1図　位置及び遺構配置図

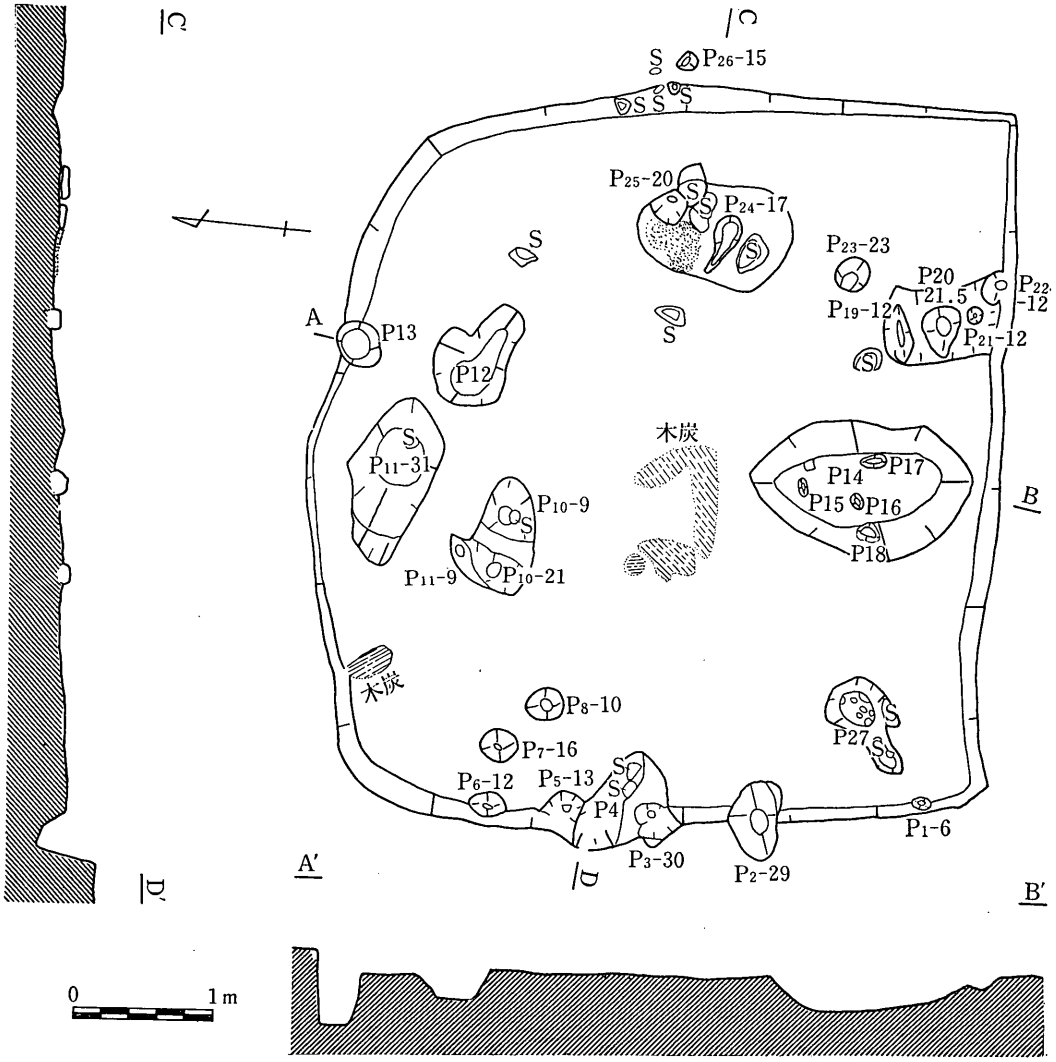
第1節　住　居　址

第1号住居址（第2図，図版2）

発掘調査地区の北端部に発見され，ローム層を掘り込んだ南北4m90cm，東西5m25cm程の規模を有する隅丸方形プランの竪穴住居址である。壁高は北で15cm，南で10cm，西で25cm，東で数cmである。壁面の状態は全般的に外傾気味で，凹凸が多かった。

床面はところどころに凹凸があり，部分的には固いローム層のタタキが認められたが，全般的には軟弱であった。床面上に多量の焼土と木炭が検出された。おそらく火災にあったものと思われる。木炭の材質は大部分が栗であった。

柱穴は何本も検出されたが，その主柱穴となりそうなのは，そのうちでも深いものと思われる。カマドは東壁中央部にあり、石組粘土カマドであったと思われるが，現在は大部分破壊されてい



第2図　第1号住居址実測図

た。

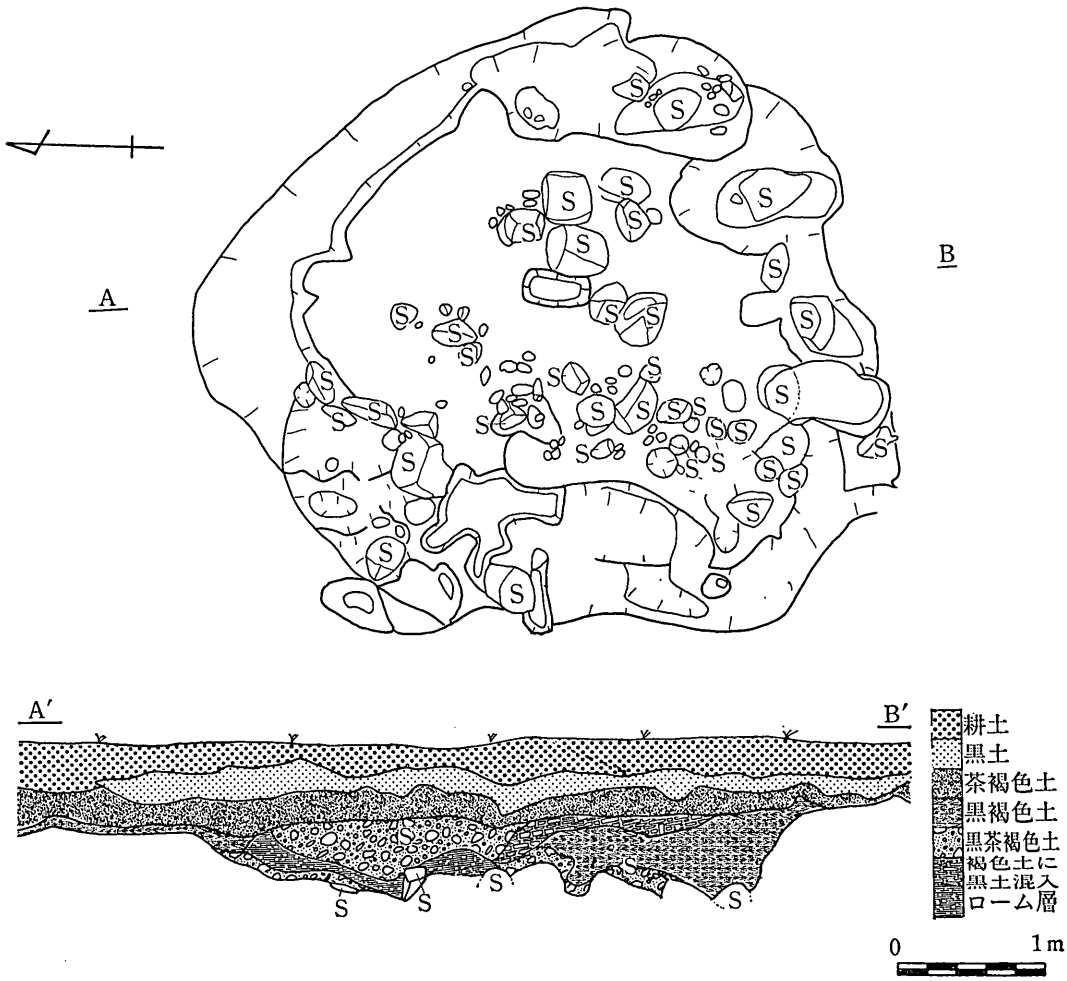
遺物は土師器，灰釉陶器が出土し，平安時代の住居址と思われる。　（飯塚政美）

第2節　ロームマウンド

第1号ロームマウンド（第3図，図版2）

発掘地区の南側の位置に検出され，ローム層面に構築され，南北4m50cm，東西4m10cm程の規模で，円形状プランを呈するロームマウンドである。

マウンドの周囲には溝状の遺構が回っており，そのなかへ，黒褐色土が混入していた。マウンドには人頭大から一抱えもする程の大石が，表面あるいはローム層面にくいこんでいた。南側の大石には磨いた跡も認められた。これらの石は大部分が花崗岩系の石質であった。遺物の出土はなく，時代決定は不可能であった。



第3図　第1号ロームマウンド実測図

第2号ロームマウンド（第4図，図版3）

第1号ロームマウンドの南側に近接した位置に検出され，ローム層面に構築され，南北3m程，東西2m10cm程の規模で，ところどころで角張ってはいるが，全体的には長円形状プランを呈するロームマウンドである。

マウンドの周囲には溝状の遺構が回っており，そのなかへ，黒土が多量に混入していた。マウンドのなかへは少量の花崗岩や細礫が含まれていた。

遺物は何も出土せず，時代決定も不明である。

第3号ロームマウンド（第5図，図版3）

4個のロームマウンド中最も北側に位置して発見され，すぐ南側に第4号ロームマウンドがある。ローム層面に構築され，南北2m65cm，東西2m75cm程の規模で，ところどころで，へっこんではいるが，全般的には長円形状プランを呈するロームマウンドである。

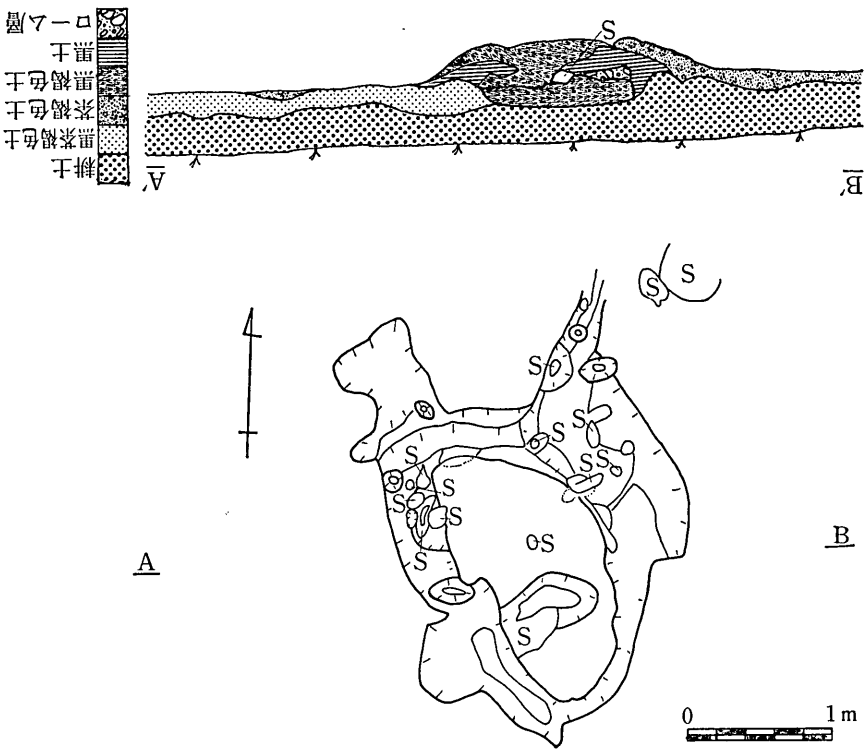
周囲には溝状の遺構が発見され，そのなかへ，黒土が入り込んでいた。第1号ロームマウンド，第2号ロームマウンドと比較して，本ロームマウンドは礫や砂の混じりは少なかった。遺物の出土は何もなく，時代は不詳。

第4号ロームマウンド（第6図，図版4）

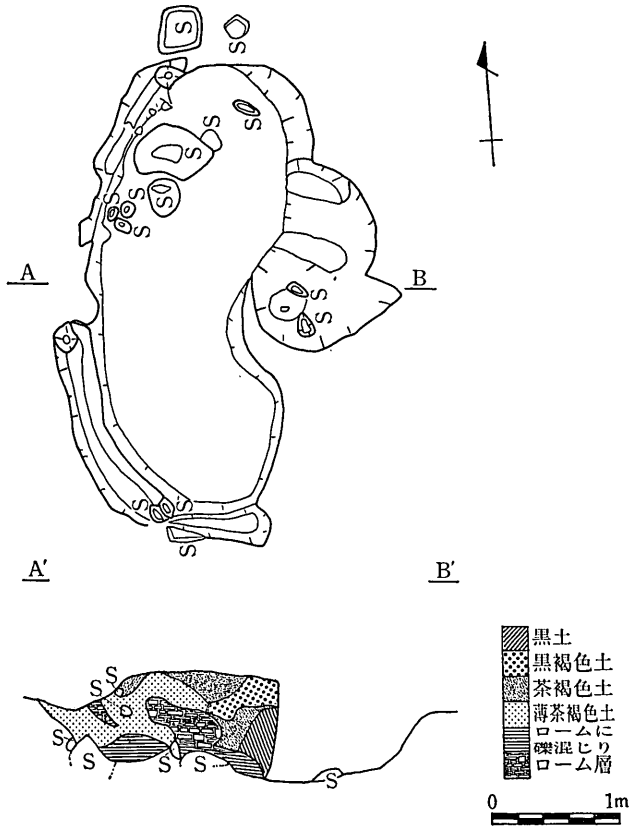
南側に第1号ロームマウンド，北側に第3号ロームマウンドにはさまれた位置に発見され，ローム層面に構築され，南北2m20cm，西東2m30cm程の規模で，ところどころに起伏はあるが，全般的には円形状に近い形態をとっている。

周囲には溝状の落ち込みがみられ，それには黒褐色土が充満していた。石の混じりは少なく，わずかに花崗岩が混入していた。遺物は何も出土せず，時代決定は不可能かと思われる。

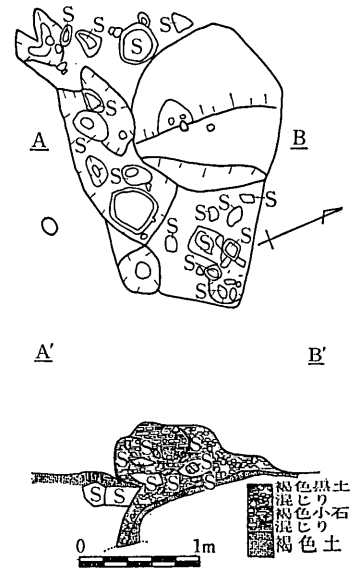
（飯塚政美）



第4図　第2号ロームマウンド実測図



第5図　第3号ロームマウンド実測図



第6図　第4号ロームマウンド実測図

第3節　溝状遺構

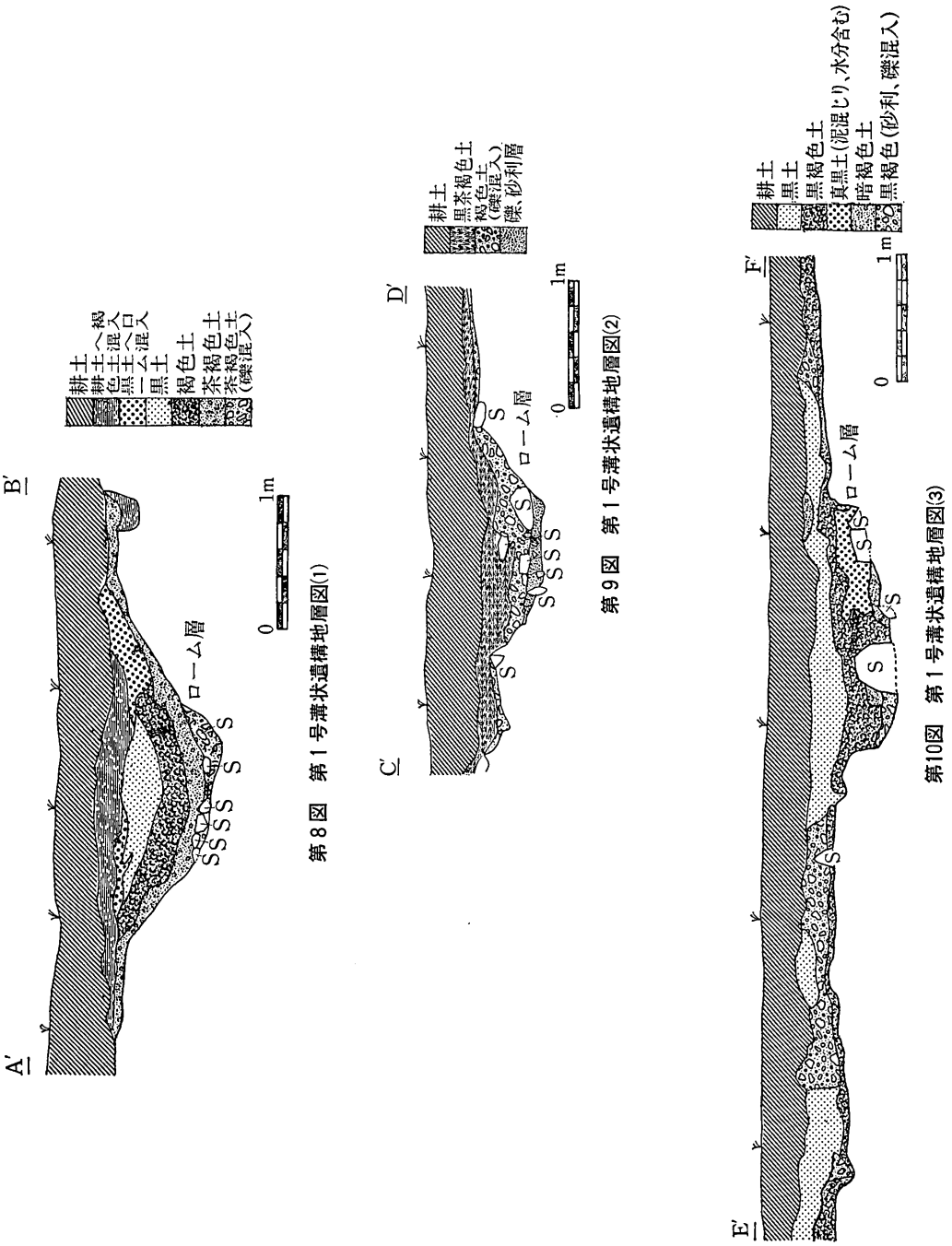
第1号溝状遺構（第7～10図，図版4～5）

本遺構は発掘調査予定地の北側の方に検出され，近くには第1号住居址がある。ローム層を掘り込んで構築してあり，東西に細長く走っていた。その規模は東西は用地外であったので全部発掘ができず不明である。南北の幅は広いところでは2m70cm程，狭いところでは1m50cm位を測る。

平面プランはところどころで曲折するが全般的に帯状になっている。断面は最も西側では南壁に中段が設けられていた。全般的にはU字形状を成していると思われる。壁面は，南，北両面ともに，細礫が混入しており，かたく，やや外傾気味で凹凸が少なかった。

底面はハードローム層中にあり，凹凸が顕著であった。底面のところどころに細礫から一抱え程もある石が無雑作に混入していた。また，同面上には砂や細礫の堆積が多かった。遺物は底面近くより元祐通宝が出土した。したがって本遺構は中世のものと思われる。第7図，第1号溝状遺構実測図は後の袋の中へ，第8～10図の第1号溝状遺構地層図は本文中に記載してあるので，双方を照合してみて下さい。

（飯塚政美）



第8図　第1号溝状遺構地層図(1)

第9図　第1号溝状遺構地層図(2)

第10図　第1号溝状遺構地層図(3)

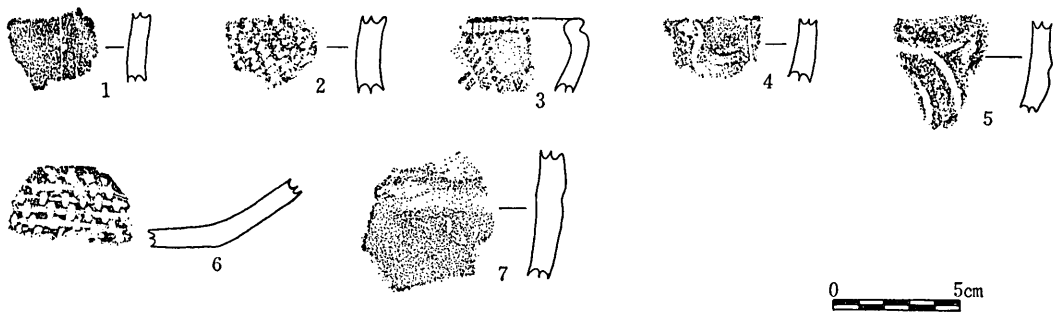
第Ⅲ章　遺　　物

第１節　土器・灰釉陶器

今回の発掘した土器・灰釉陶器類は数少なく，そのなかで，(第11～12図)に記載したのが，まあ，どちらかと言えば良好な部類に属している。第11図の（１）は胎土中に少量の繊維を含んでいる土器である。色調は黄褐色を呈し，焼成は中位である。縄文早期末葉に位置づけられよう。

（２）は幅広の縄文帯が規則正しく施されているもの。色調は黒褐色を呈し，胎土中に多量の雲母を含み，焼成はやや良好である。縄文前期後半の土器と思われる。（３）は沈線による龍目文と爪形文の発達が見事なもの。色調は黒茶褐色を呈し，胎土中に少量の雲母を含み，焼成は中位である。縄文中期初頭頃に位置づけられよう。

（４～５）は器外面にヘラ状工具施文による沈線によって懸垂文が施されているもの。（４～５）はともに黒褐色の色調を呈し，焼成は中位である。縄文中期後半に位置づけられると思われる。（６）は網代底の破片である。茶褐色を呈し、焼成は良好である。（６）は縄文後期頃に該当すると思われる。（７）は焼きの堅い内耳質に近い土器と思われる。黒色を呈し，焼成は極めて良好である。中世に属する土器と推定できよう。



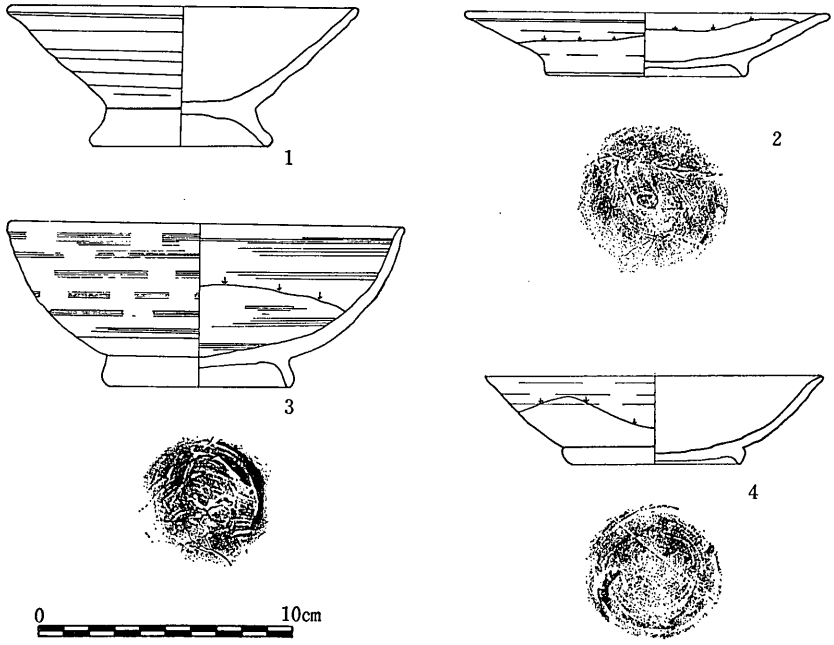
第11図　土器拓影

第12図の（１）は土師器の高台付の杯である。口縁径13.9cm，底径7.3cm，高さ5.4cmを測る。口縁はやや外反し，高台はやや開き気味の付け高台である。（２）は灰釉陶器の段皿である。口縁径14.5cm，底径8.1cm，高さ2.5cmを測る。口縁はやや外反し、高台はやや開き，内弯気味の付け高台，底部の削りは中心から外へ向かってロクロ回転によって削られている。釉は底部以下，口縁部直下に集中して施されている。

（３）は灰釉陶器の平碗である。口縁径は15.7cm，底径7.3cm，高さ6.3cmを測る。口縁はやや外反し、胴部はかなり弯曲している。高台はやや開き，内弯気味の付け高台で，底面は中心から外部に向かってみごとに削りとられている。釉はほんのわずかであり，全体的に器内面に集中している。

（４）は灰釉陶器の杯である。口縁径は13.3cm，底径6.7cm，高さ3.4cmを測る。口縁はやや外

反している。高台は外にややふくらむ付け高台で底面は中心から外へ向かってきれいにけずりとられている。釉は全面に及んでいる。



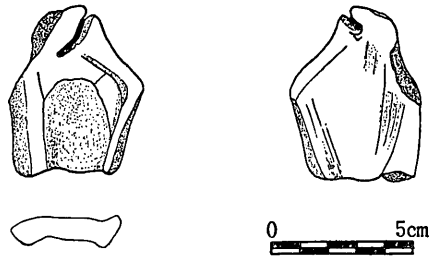
第12図　土師器・灰釉陶器実測図

第2節　土　製　品

この土製品は赤褐色を呈し，焼成は中位である。形でみる限りでは何か把手のような感がする。頭部を上に向け，口を開いた姿はあたかも蛇頭のように思われる。この蛇頭把手らしきものは極めて偏平な形をとっている。この土製品は第1号溝状遺構内より出土している。

第3節　古　　銭

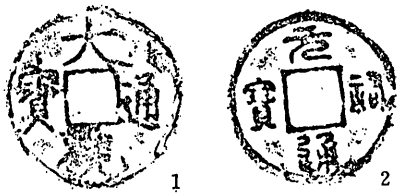
今回の発掘で出土した古銭は全部で2枚ある。第14図の（1）はグリット内より出土した大観通宝で，鋳造年代は中国北宋1107年である。（2）は第1号溝状遺構より出土した元祐通宝で，鋳造年代は中国北宋1093年である。　　（飯塚政美）



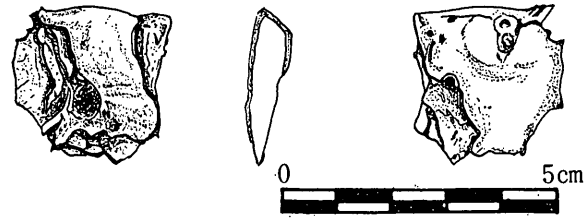
第13図　土製品実測図

第４節　金 属 製 品

第１号住居址より出土した金属製品である。材質は青銅で長い間地中に埋没していたために緑色の目にも鮮明な緑青が吹いている。周辺は全く欠損しているために，原長が不明である。したがってその用途も不明である。　（飯塚政美）



第14図　古銭拓影（１：１）



第15図　金属器実測図

第５節　石　　器（第16図（１～５），第17図）

打製石斧（第16図(1)）

本遺跡出土の打製石斧は１点を数え，下部が大きく開く撥形，硬砂岩質製である。下端部の刃部は鋭利であり，いかにも切れそうな様相を呈していた。相当量の重量があり，伐採に使用されたものと思われる。グリット内出土

磨製石斧（第16図(4)）

打製石斧同様，磨製石斧の出土は１点だけであった。下端部は欠損し，刃部は鋭利で，小型の蛤刃を呈していた。石質は緑泥岩を利用してあつた。グリット内出土

剝片石器（第16図（２～３））

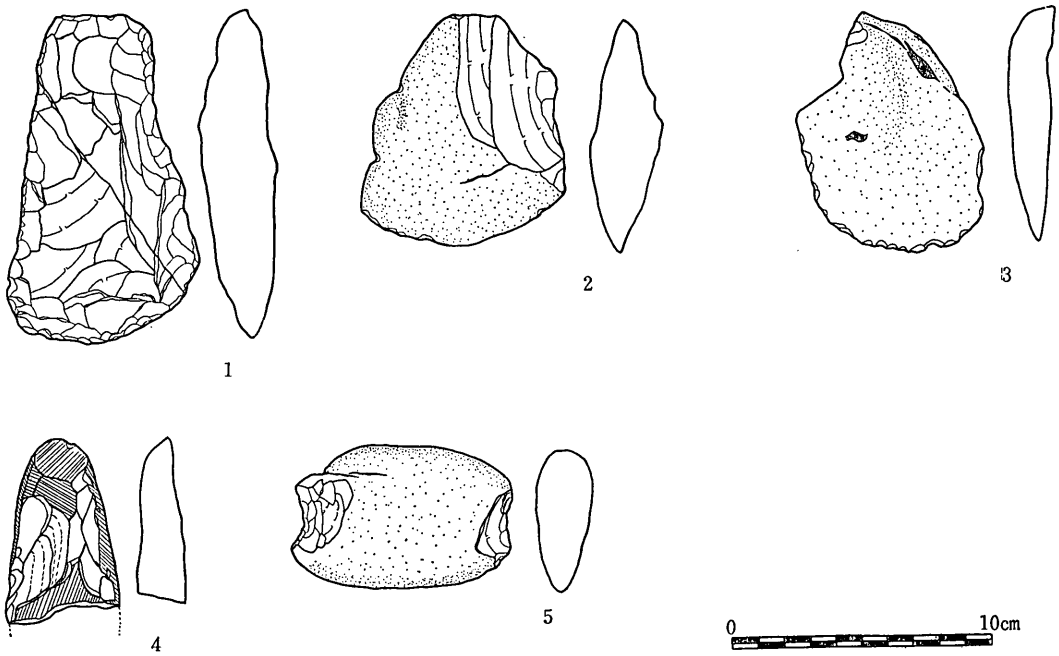
２点の出土があり，双方とも硬砂岩を用いてあった。素材は２つとも円礫を打ち欠いてできた剝片に刃をつけて使用したものである。従って，刃部の断面は鋭角になっていた。刃部の剝離調整は(2)では雑で，(3)は割合に丁寧になされていた。グリット内出土

石錘（第16図(5)）

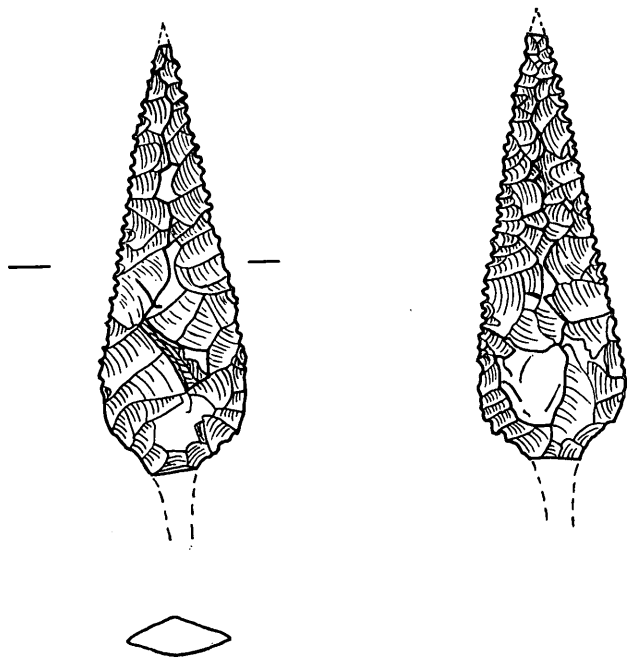
１点だけの出土であった。その打ち欠いた部分は深く，大きい状態を呈し，石錘としてはかなりの重量があり，優品であった。石質は硬砂岩製であった。グリット内出土

有舌尖頭器（第17図）

グリット内出土の有舌尖頭器である。先端部の一部と舌は欠損しているが，優品であった。やや細身でスマートな作りである。調整は両面ともに入念に行われ，細長い剝離痕が整然と走り，押圧剝離技法の最高の出来ばえを実証している好資料であろう。両側縁は鋸歯状を呈している。断面は割合に扁平で，青チャート系の石質であった。　（飯塚政美）



第16図　石器実測図



第17図　石器実測図（1：1）

第Ⅳ章　ま と め

西部開発事業施行前に発掘調査を実施した井の久保遺跡の状況及び成果は，前述のとおりであるが，予算や，整理日数等々の問題からして，深い研究は相当長時間が必要と思うので，ここでは発掘調査を進めていく段階で，また，調査終了後の問題点を列記して，今後の研究の参考に資したい。

本遺跡の規模と立地

本遺跡地の規模は藤沢川に沿った地点が濃厚であり，この川より離れるに従って，遺物分布状況は希薄となっていく。遺物の分布範囲は南北100m位，東西300m位に及んでいると推定できよう。

立地については北側では藤沢川右岸第一河岸段丘面に，東側は天竜川右岸第二河岸段丘面にはさまれたかっこうになっており，どの段丘崖からも多量の湧水が認められる。

集落の構成

精査面積は凡そ1,000㎡であったが，そのなかに平安時代の竪穴住居址1軒の存在を確認できたが，この住居址の構築された時代からみて，もう少し広範囲にわたって発掘調査を実施したならば，その数は増加することは相違ないと思われる。現段階では項目にかかげた内容について，究明するには資料不足の感がある。

遺構について

今回の発掘調査で検出された遺構は平安時代の竪穴住居址1軒，時期不詳のロームマウンド4基，溝状遺構1基であった。これらの遺構の主なる特徴について列記してみると次のようになる。

(1)　平安時代の竪穴住居址

ローム層を掘り込んだ竪穴住居址で，南北4m90cm，東西5m25cmの規模で，隅丸方形プランであった。本住居址は火災にあったとみえて柱や屋根の桁や垂木に利用したと推定できる栗材の炭化物が検出された。栗材を利用することはその材の耐久性が長いことをすでに経験的に知っていた事実を実証してくれる。

(2)　ロームマウンド

4基検出された。第1号ロームマウンドの規模は南北4m50cm，東西4m10cm，第2号ロームマウンドは南北3m，東西2m10cm，第3号ロームマウンドは南北2m65cm，東西2m75cm，第4号ロームマウンドは南北2m20cm，東西2m30cmであった。

(3)　溝状遺構

全面発掘ができなかったので，長さは不明であった。幅は広いところで2m70cm，狭いところで1m50cm位であった。断面はU字形状で，南側に一部分中段が設けられていた。この段を有するのは南北朝頃の際立った特徴と考えられている。このような類例は上伊那郡下では駒ケ根市の赤須城，箕輪町の南城にみられている。いずれにしろ中世の城郭に関係した遺構と思われる。現段階では堀址か，用水路的な溝かは不明であった。この遺跡付近は建長3年（1251）2月6日小井弓能綱

の譲状には次のように記されている。『柳沢の堺ハ，ゐの窪のほそみち，たかのすを見あつへし，ひかしハ，よこ道をさかい，みなみハ，藤沢川をきる水の立とまりまて，そのうちに御作山本より外に余所ある間敷候』

遺物について

今回出土した土器は縄文早期末葉の茅山式，縄文前期後半の諸磯式，縄文中期初頭の平出3A式，縄文中期後半の加曽利E式，縄文後期中頃の加曽利B式，中世の内耳土器であった。灰釉陶器は全て10世紀後半から11世紀前半頃に位置づけできよう。土製品は勝坂期にみられる蛇頭のように思われる。古銭は全て北宋銭であり，明銭の出土が1枚もないことは時代決定において大いに期待がもてる。金属製品の用途は不明であった。ただ，青銅製品が出土したことは特殊な住居址と考えられよう。

伊那市内の平安時代の住居址については17頁から21頁の第2表に項目に添ったまとめ方をしてあるから今後平安時代の研究に活用してくれることを期待します。最後にこの発掘調査に予算面及び日程等に御指導を賜った長野県教育委員会文化課指導主事関孝一氏，現場での調査の便宜をとりはからって下さった南信土地改良職員一同及び地元の土地改良役員の方々，さらに直接発掘調査に手をわずらわせた調査員の諸先生並びに作業員の各位に対し，深く感謝致す次第であります。

（飯塚政美）

第1表　伊那市内に於ける平安時代住居址一覧表

住　所	遺跡名	住居址番号	プラン	規模（m）		カマドとその位置	備　考
				南北	東西		
西春近諏訪形	菖蒲沢	1　号	隅丸方形	5.75	5.05	不明 西壁中央 やや南寄り	カマドと思われる所に細礫が密集していた
西春近柳沢	南　村	7　号	隅丸方形	4.0	3.83	石組粘土 東壁中央	火災にあった
	〃	8　号	隅丸方形	5.5	5.7	石芯粘土 東壁中央	
西春近沢渡	眼子田原	1　号	隅丸方形	3.8	3.7	石組粘土 西壁中央 やや北寄り	火災にあった
	〃	2　号	隅丸方形	4.9	4.65	不明 西壁中央	3号住の上に貼床にある
	〃	3　号	隅丸方形	3.4	2.5	不明 西壁中央	2号住の下にあり
	南丘A	1　号	隅丸方形	4.8	5.4	石組粘土 東壁中央	カマドは13個の自然石で組まれ，袖石の一部は取りはずしてない天井石の保存はよい
	〃	2　号	隅丸方形	4.8	5.0	石組粘土 東壁中央	カマドは20個以上の自然石で組み，粘土とロームを多量に使用
西春近白沢	名廻南	1　号	方　形	5.25	4.7	石組粘土 東南の隅	最初のカマドは北壁中央にあり，後で移動して現在地となる
	名　廻	1　号	方　形	4.9	4.7	破損し焼土のみ 西壁	床面北と南縁に周溝あり，カマドは東側より西側へ移動した
西春近宮の原	宮の原	1　号	隅丸方形	4.95	4.95	石組粘土 東壁中央	
	百駄刈	5　号	隅丸方形	4.65	4.62	石組粘土 東壁中央 やや南寄り	黒土層中に構築，煙道は完全に保存，西壁下に焼土あり，鉄製紡錘車出土
	大　境	1　号	方　形	5.0	4.1	石組粘土 南西隅	小礫混りの黄褐色石質土を掘り込んで構築
	〃	2　号	方　形	5.7	4.6	石組粘土 東側中央	遺物が床面覆土から大量に出土
西春近城	山の根	3　号	隅丸方形	4.23	4.42	粘土カマド （少量の石） 東壁中央	柱穴6本，床面は50cm位の貼り床
	〃	4　号	隅丸方形	4.4	3.9	石組粘土 東壁中央	わりあいに整った住居址
	〃	5　号	隅丸方形	3.45	4.48	石組粘土 （小石多量） 西壁中央	第3層褐色砂質土を基盤とする
	〃	7　号	方　形	3.45	3.4	石組粘土 東壁中央	黒褐色土層に掘り込まれ貼り床である
西春近山本	常輪寺下	10　号	隅丸方形	3.95	3.7	石組粘土 東壁中央	11号住に切られる
	北条（上の段）(1)	2　号	隅丸方形	3.75	4.10	石芯粘土 西壁中央	北側に周溝あり
	〃	3　号	隅丸方形	5.6	4.75	石組粘土 西壁中央	

住　所	遺跡名	住居址番号	プラン	規模（m）		カマドとその位置	備　考
				南北	東西		
西春近山本	北条（下の段）(2)	1 号	隅丸方形	5.15	5.4	石芯粘土 北壁中央	破壊がひどい
	〃	2 号	隅丸方形	2.9	3.5	不明 西壁	6号住と切り合い関係で北及び東壁の存在は不明
	〃	3 号	隅丸方形	3.7	3.75	石組粘土 西壁中央 やや南寄り	4号，5号，11号住を切って構築してある
	〃	12 号	隅丸方形	5.0	4.15	石組粘土 西壁中央	南側壁外に柱穴3本一直線上にあり，北側には2本コーナーにある
	城　平	1 号	不　明	不明	不明	不明 西壁	破損の為花崗岩の袖石と火床の一部を残す外全体プランは把握できない
	〃	2 号	隅丸方形	3.84	4.7	石組粘土 東壁中央 やや南寄り	北壁破損，床面はロームの叩きである
	〃	3 号	隅丸方形	4.19	4.65	石組粘土 西壁中央	北壁及び南壁沿いに浅い周溝が設けられている
	〃	4 号	隅丸方形	3.2	3.43	石組粘土 東壁中央	耕作による撹乱がひどい。西壁に沿う全面と南北壁の一部にV字状の周溝
	〃	5 号	隅丸方形	4.3	4.35	石組粘土 西壁	カマドの残存状態はやや良好
	〃	6 号	隅丸方形	5.5	5.2	石組粘土 西壁中央	北壁沿いに周溝あり
	〃	7 号	隅丸方形	4.85	4.53	石組粘土 西壁中央	南壁沿いにのみ周溝あり
	〃	8 号	方　形	3.55	3.9	石組粘土 東壁中央	壁の裾に東壁の一部を除いて周溝あり
	山本田代	1 号	方　形	5.8	6.6	石組粘土 西壁	四囲に周溝あり，床面中央からやや東寄りに石囲みの炉あり，遺物が非常に多い
	〃	2 号	方　形	4.8	4.1	石組粘土 西壁	黒褐色土を掘り込んで構築
	〃	3 号	方　形	4.0	4.2	石組粘土 北壁	柱穴は壁外に6本
	〃	4 号	方　形	3.7	3.4	石組粘土 東壁北隅	5号住に西側を切られる。床面黒色土多い
	〃	5 号	方　形	5.1	5.0	石組粘土 西壁	4号住を切る。柱穴は壁外に9本
	〃	6 号	方　形	4.0	4.6	石組粘土 西壁	床は細礫混りの土層を掘り込んだ為不良で，柱穴は不確認
西春近上島	上　島	4 号	隅丸方形	4.5	3.9	石組粘土 西壁 やや南寄り	
伊那下小沢	月見松	36 号	方　形	4.3	4.1	石芯粘土 西壁中央	暗褐色土層中に構築
	〃	37 号	方　形	4.15	4.35	石芯粘土 東南隅の壁	火災にあった住居址で，木炭の遺物が豊富である
	〃	39 号	方　形	3.7	4.8	石芯粘土 西壁中央	暗褐色土層中に構築
	〃	46 号	方　形	4.5	3.7	石芯粘土 東南隅の壁	暗褐色土層中に構築

住　所	遺跡名	住居址番号	プラン	規模（m）		カマドとその位置	備　考
				南北	東西		
伊那下小沢	月見松	67号	方　形	5.1	5.6	石組粘土 南東隅	カマドに多量の礫使用，柱穴はカマド側壁２本，床面２本，壁外５本
	〃	68号	方　形	5.05	5.25	石組粘土 南東隅	住居址が火災にあい，炭化した家屋材の多くは中心に向って焼け落ちている
	〃	69号	方　形	6.55	5.5	石組粘土 北壁	東壁から南壁にかけて周溝あり，南東隅に古いカマド跡あり
	〃	105号	長方形	3.65	2.02	石組粘土 北壁東寄り	国分期Ⅲ，石帯の出土
伊那山寺	鳥居原	1号	隅丸方形	3.9	4.1	石組粘土 西壁中央	
伊那平沢	丸山清水	8号	隅丸方形	4.3	3.95	石組粘土 北壁	13号住を切る
	〃	13号	隅丸方形	5.3	5.0	石組粘土 西壁中央	８号住に南側と西側を切られる
	〃	17号	隅丸方形	3.65	4.30	石組粘土 北壁	23号住を切って構築
伊那横山	おぐし沢	1　号	隅丸方形	3.9	4.5	石組粘土 東壁中央	火災にあったと思われる。又破壊がひどい
西箕輪中条	宮垣外	2　号	隅丸方形	不明	不明	石組粘土 東壁中央	１号住を切り，３号住に切られる
	〃	3　号	隅丸方形	不明	不明	不明	２号住を切る
西箕輪羽広	金鋳場	1　号	隅丸方形	6.4	不明	石組粘土 西壁北寄り	礫混りの暗褐色土を掘り込んで構築，緑釉陶器出土
	〃	2　号	隅丸方形	3.8	3.4	不明 南東の隅	礫混りの暗褐色土を掘り込んで構築
	〃	3　号	隅丸方形	4.9	4.1	石芯粘土 西壁中央	礫混りの暗褐色土を掘り込んで構築，緑釉陶器出土
	〃	4　号	隅丸方形	4.1	3.9	石組粘土 東壁中央 やや北寄り	礫混りの暗褐色土を掘り込んで構築，吹子，鉄滓の出土
	〃	5　号	隅丸方形	不明	不明	不明	11号，12号，13号住に切られる
	〃	6　号	隅丸方形	4.2	不明	不明 東壁中央	礫混りの暗褐色土を掘り込んで構築
	〃	7　号	隅丸方形	4.1	4.8	石芯粘土 西壁中央	礫混りの暗褐色土を掘り込んで構築
	〃	8　号	隅丸方形	4.2	4.0	石芯粘土 西壁中央	礫混りの暗褐色土を掘り込んで構築
	〃	9　号	隅丸方形	4.2	3.9	石芯粘土 東壁中央	礫混りの暗褐色土を掘り込んで構築
	〃	10　号	隅丸方形	不明	不明	不明	礫混りの暗褐色土を掘り込んで構築
	〃	11　号	隅丸方形	不明	不明	不明	13号住に切られる
	〃	12　号	隅丸方形	不明	不明	不明	13号住を切つて構築
	〃	13　号	隅丸方形	不明	不明	不明	12号住に切られる
西箕輪中条	中の原	1　号	隅丸方形	6.1	6.2	石組粘土 南壁中央	吹子の破片多量に出土
	〃	2　号	隅丸方形	4.6	4.55	石組粘土 西壁中央	

住所	遺跡名	住居址番号	プラン	規模(m) 南北	規模(m) 東西	カマドとその位置	備考
福島	福島A	1号	方形	3.7	3.7	石芯粘土 南東壁中央	北東並びに北西側壁下に周溝あり
	〃	2号	方形	4.8	4.0	石芯粘土 北西壁の中央より1m西寄り	住居の拡張（約1m）の跡が見られた。周溝なし
	〃	3号	長方形	2.8	3.5	石芯粘土 北西壁中央	4号住を約$\frac{1}{2}$程切り構築
	〃	4号	長方形	4.5	2.9	粘土 北西側壁中央	3号住に約半分切られる。周溝なし
	〃	5号	台形	4.4	6.0	粘土 北西壁ほぼ中央	周溝なし，鉄製品，紡錘車，刀子，鏃先及び土錘出土
	〃	6号	台形	3.8	3.0	石芯粘土 東壁中央	北，東，西側壁下に周溝あり
	〃C	7号	方形	7.0	7.4	石芯粘土 西壁中央	全面貼床，四囲に周溝あり，鉄斧，刀子，鉸具，鈎出土
	〃	8号	長方形	5.5	5.7	粘土 東壁中央やや北寄り	10号住の西側を一部切り構築，四囲に周溝あり，刀子出土
	〃	9号	長方形	5.0	5.5	不明 西壁	周溝は認められなかった。火災にあった住居，10号住の下に重複，8号住に切られる。鎌，刀子，帯先金具出土
	〃	10号	方形	4.5	4.5	石芯粘土 南東側壁中央	9号住上に構築し，1部8号住に切られる
	〃D	11号	方形	6.1	6.1	粘土 東壁中央	四囲に周溝あり，刀子，石帯出土
	〃	12号	方形	5.0	5.0	粘土 東壁中央	13号住により破壊される。刀子出土
	〃	13号	台形	4.4	5.0	石芯粘土 東壁中央	12号住の東壁を壊して周築，北東，西壁下に周溝あり，刀子，鉄鏃出土
	〃	14号	不正長方形	5.8	5.2	石芯粘土 西壁ほぼ中央	北，東，南壁下に周溝あり
	〃	15号	不明	不明	不明	不明	14号住により東半分以上破壊される
	〃B	16号	長方形	7.0	6.2	石芯粘土 北西側壁中央	周溝が四囲にあり，ピンセット状鉄器，刀子出土
	〃	17号	方形	3.7	3.7	石芯粘土 東壁の北隅	周溝は四囲にあり，鉄鏃，釘出土
手良中坪	砂場	1号	隅丸方形	4.6	5.1	石芯粘土 東壁中央	2号，3号住を切って構築
	〃	2号	方形	8.72	8.84	石芯粘土 東壁中央	1号，3号住に切られ，4号住を切る
	〃	3号	隅丸方形	5.42	6.4	石芯粘土 東壁中央	1号住に切られ，2号住を切る
	〃	7号	隅丸方形	5.36	5.95	石芯粘土 東壁北隅	5号住上に貼り床し，8号住を切って構築
富県北福地	御殿場	2号	方形	4.5	4.0	石芯粘土 カマドに土器片使用 北壁	焚口を平盤石を立てて粘土で固め，主体部は四個の石と土器片を組合せ粘土で作る。鉄鏃，磨製石鏃出土

住　所	遺跡名	住居址番号	プラン	規模(m)		カマドとその位置	備　考
				南北	東西		
富県北福地	御殿場	不明	不明	不明	不明	不明	
富県南福地	小御堂	1号	方形	3.88	3.7	石組粘土 南壁の東隅	旧カマドは西壁の北寄りにあり
	〃	2号	長方形	6.1	4.48	石組粘土 北壁中央	火災にあった住居址，北壁中央にカマド状の遺構が見られた
富県北福地	根木谷中畑	1号	隅丸方形	3.9	3.66	石組粘土 北壁中央	カマドが壁を切り込んで構築してある
	〃	2号	方形	4.70	4.67	石組粘土 西壁の南寄り	3号住を拡張して2号住を構築
	〃	3号	隅丸方形	不明	3.1	石組粘土 西壁の南寄り	4号住に貼床して構築
	〃	4号	長方形	5.16	不明	石組粘土 北東の隅	2号，3号住に貼床されている
	〃	6号	長方形	不明	不明	石組粘土 東壁中央	火災にあった住居址

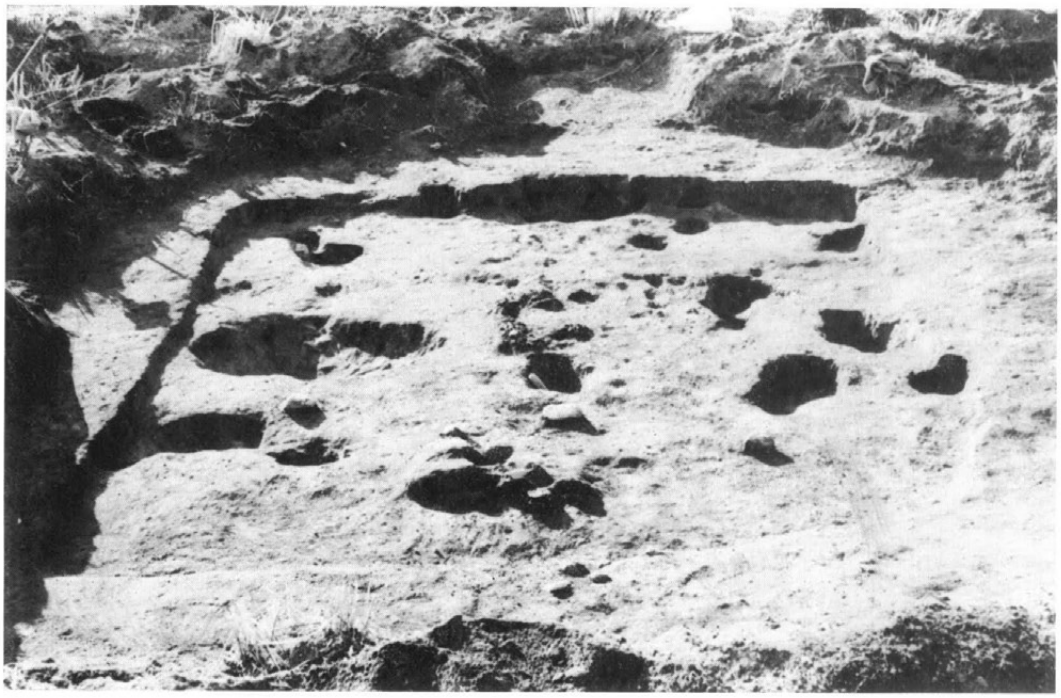
図　版

図版一　遺跡全景

遺跡地を南側より眺む

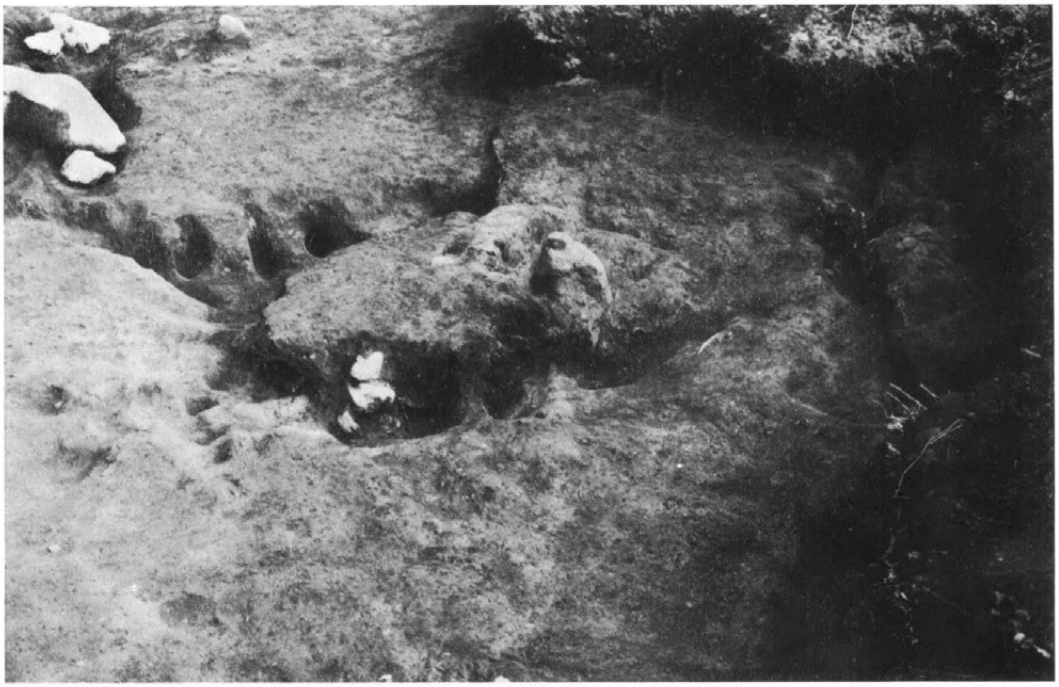
遺跡地を東側より眺む

図版二　遺　構

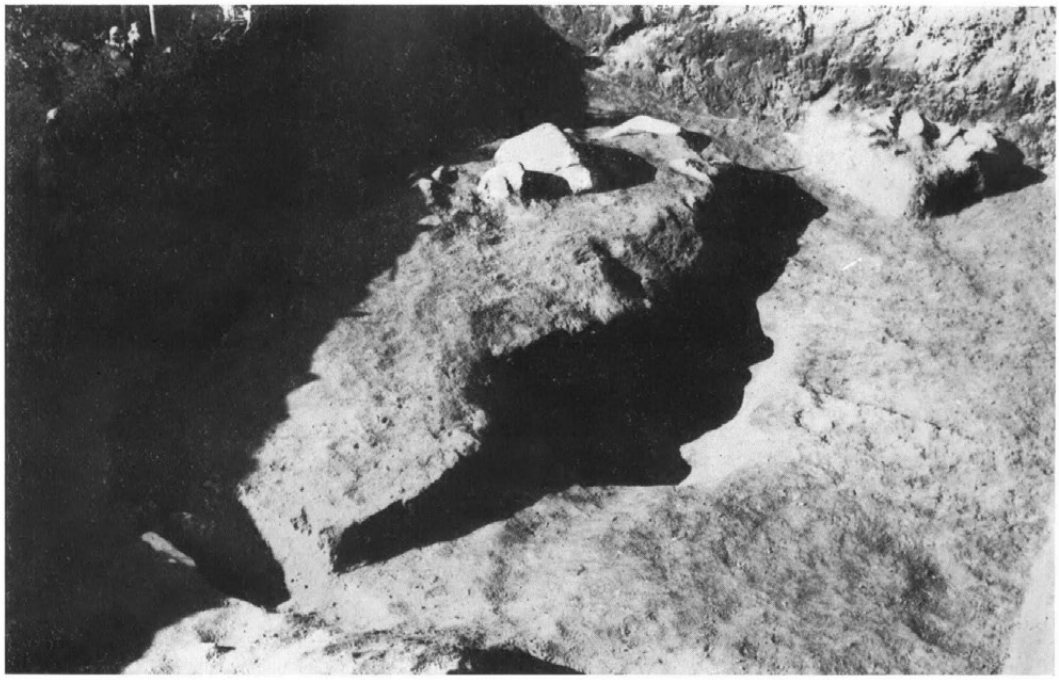


第１号住居址

第１号ロームマウンド

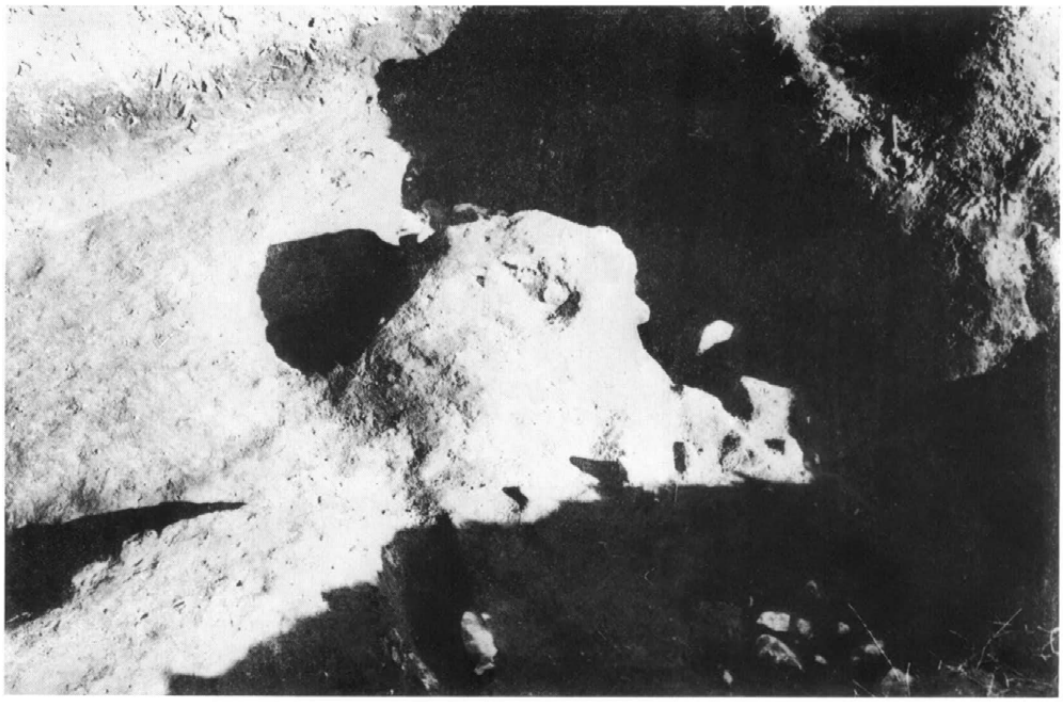


第2号ロームマウンド

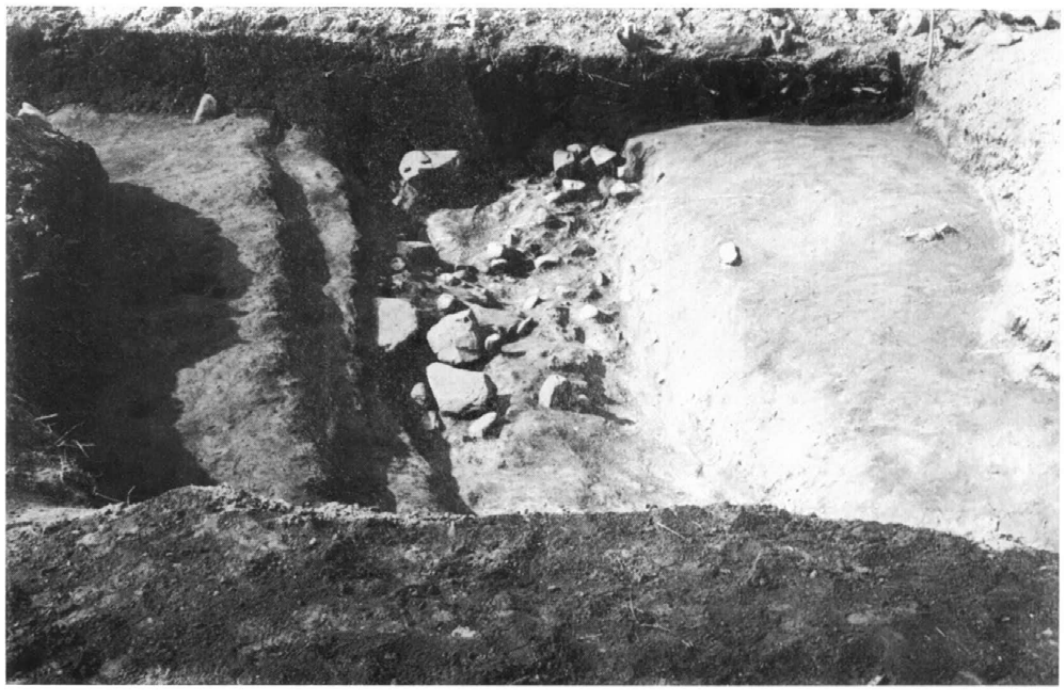


第3号ロームマウンド

図版四　遺　構



第４号ロームマウンド

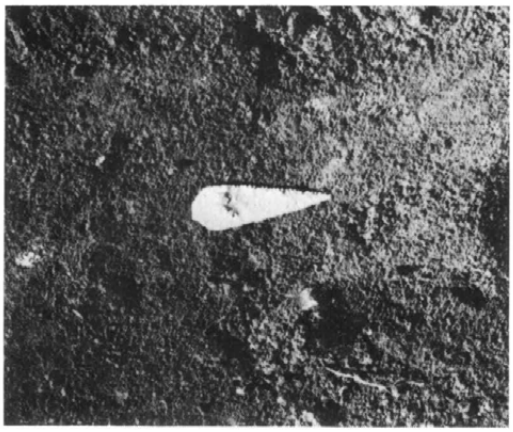


第１号溝状遺構

第１号溝状遺構

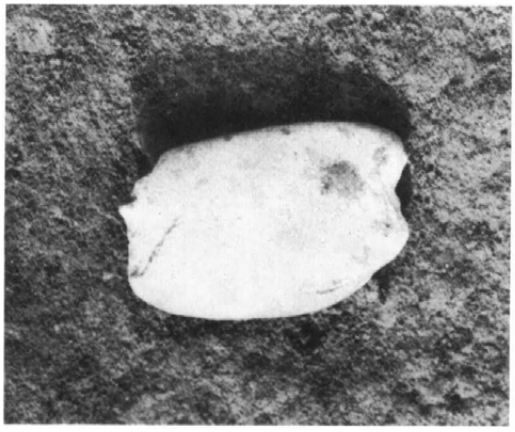
第１号溝状遺構地層

図版六　遺物出土状況

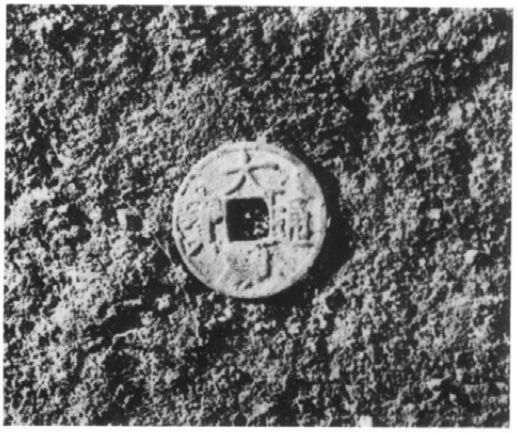


石器出土状況

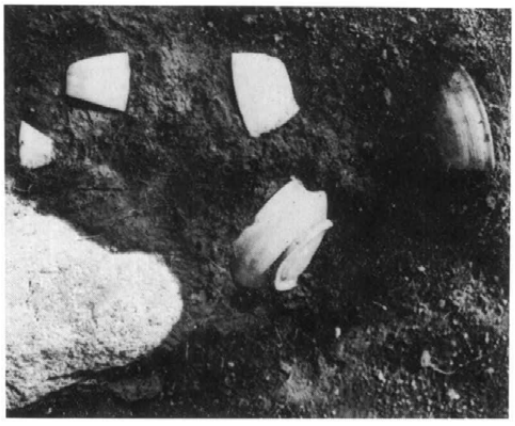
石器出土状況



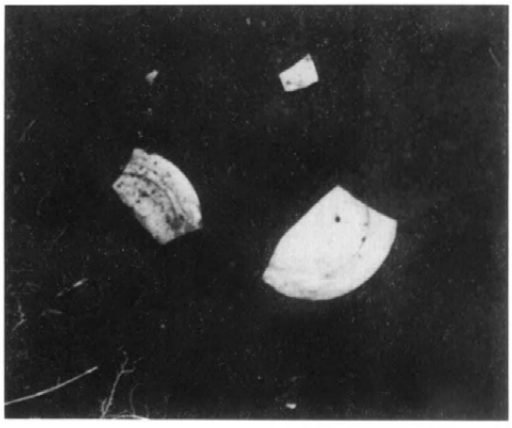
石器出土状況



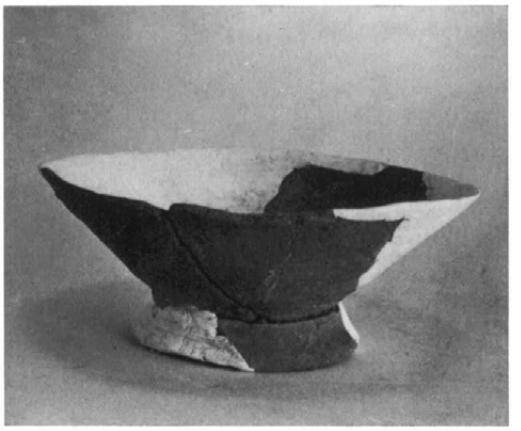
古銭出土状況



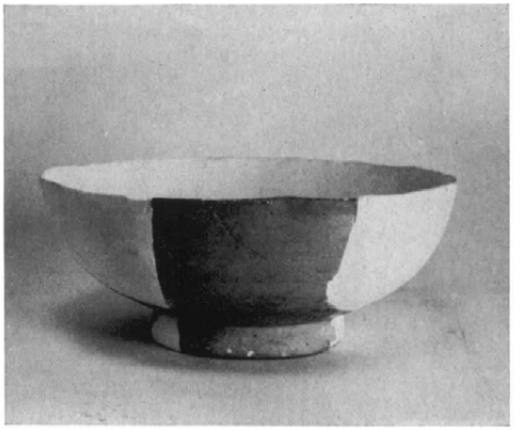
灰釉陶器出土状況



灰釉陶器出土状況

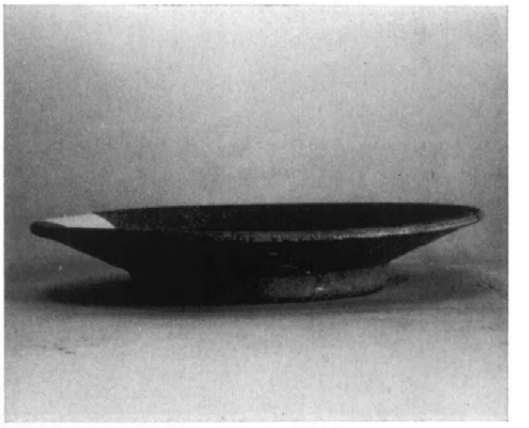


土　師　器

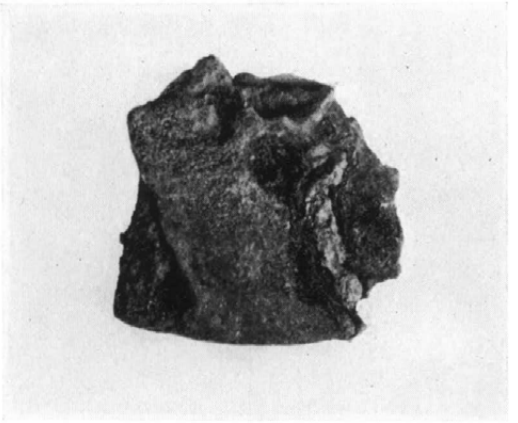


灰釉陶器碗

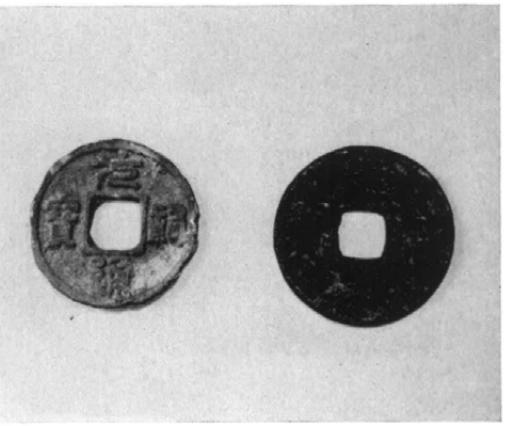
灰釉陶器杯



灰釉陶器段皿



金属製品



古　　銭

図版八　出土遺物

石　　器

井の久保遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和56年3月17日　印刷

昭和56年3月20日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　株式会社　ぎょうせい

東京都新宿区西五軒町52

表木原遺跡

目　　次

目　　次……（1）
挿図目次……（1）
図版目次……（1）

第Ⅰ章　発掘調査の経過……（2）

第1節　発掘調査の経緯……（2）
第2節　調査の組織……（2）
第3節　発掘日誌……（3）

第Ⅱ章　遺構・遺物……（3）

第Ⅲ章　ま と め……（5）

挿　図　目　次

第1図　位置及び地形図……（4）

図　版　目　次

図版1　遺跡全景
図版2　遺跡地の現状

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島，東方部落，昭和49年度の東方，村岡，城，山本部落にわたって行われてきました。昭和51年度は沢渡の上段（小字名を眼子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出，宮の原，中村部落にかけて行われました。昭和53年度は柳沢，白沢，南小出部落が，昭和54年度は諏訪形区，昭和55年度は諏訪形と井の久保にまたがる高遠道遺跡，井の久保にある井の久保遺跡，表木にある表木原遺跡の三遺跡が該当しました。

発掘着工以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では，その件について承諾しましたので，市教育委員会を中心に，表木原遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を行うことにしました。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかりました。

第2節　調査の組織

表木原遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽映士	伊那市教育委員会委員長
〃	向山辻雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	三沢昭吾	伊那市教育委員会教育次長
〃	石倉俊彦	〃　社会教育課長
〃	柳沢一男	〃　〃　課長補佐
〃	武田則昭	〃　社会教育係長
〃	沖村喜久江	〃　社会教育主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	飯塚政美	〃

調査員	福沢幸一	長野県考古学会会員
〃	田畑辰雄	〃
〃	小木曽清	宮田村考古学友の会会長
〃	春日徳明	大正大学学生
〃	小平和夫	長野県考古学会会員

第3節　発掘日誌

昭和56年2月19日～21日にかけて，当初の計画通り，現場での立合い調査を実施した。立合調査とは遺跡地の現状をそうくずさずに土地改良事業を実施するとのことで，ブルトーザーの入った後に，分布調査をして，そのいかんによって発掘調査を実施することである。前述した日程で表面採集及び現地踏査を実施したが，遺物の出土及び遺構の検出は全くなかった。　（飯塚政美）

第Ⅱ章　遺構・遺物

先に述べた様に遺構・遺物の検出は何もなかった。ただこの遺跡の東端に存在している表木城を中世の遺跡と考えて，それの現状及び形態について記してみると次のようになる。西春近表木にあり，天竜川右岸第二河成段丘面上に存在している。すぐ下の天竜川右岸第一河成段丘面は下村部落に位置している。標高は650 m位で，天竜川との比高差は50m位を測定できる。本郭部は，西，北，南側の三方は深い堀が回っている。東側は国鉄飯田線開通工事の時に破壊されたとみえて，現在は不明である。本郭部は周囲に高い土塁が回り，わずかに西部の一部分で土塁が切れている。この部分がおそらく大手であろう。大手とは城郭の表門となるところである。本郭部の規模は東西45m，南北54m位を測定できる。本郭部の北側に堀をへだてて外郭部が存在している。本郭部には稲荷社を祭ってあり，稲荷社の近くに以前は井戸があったらしく，凹地の跡を認めることができた。

城郭形態から分類すれば平山城式館城址で，郭が南北に長い方形連郭式に含まれると思われる。附近の小字名にはタイホウという世にも不思議な呼び名が現存している。　（飯塚政美）

第１図　位置及び地形図（１：1,500）

第Ⅲ章　ま　と　め

前述した表木城の歴史的背景及び関連性については附近の城館址の実態を把握し，大きな形態（いわゆる城郭群）としての結び着きを考えてみなければ問題究明は成り立たないと思う。そこで，藤沢川以前の西春近南部地区に於ける中世城館址の一つ一つをとりあげて，その現状，実態及び歴史的背景を記してみよう。

(1)　下牧の城

西春近下牧にあり，東側は天竜川右岸第一河岸段丘面上に存在している。城郭内には土塁，空堀がみられ，とくに堀は東西に２本構築されている。城郭内の一角に稲荷社，荒神様を祭ってあり，人呼びの丘といわれる小高い塚が設けられてあった。

城郭形態から分類すると，平山城式館城址で，郭が南北に長い方形連郭式に含まれると思われる。附近の小字名は南垣外，羽場，城下，城，中村，平林等がみられる。

歴史的にみて，大塔合戦記にみられる下牧尾張守はこの城に関係した人物ではないかと思われる。(註1)

(2)　町屋の城

西春近諏訪形にあり，北西から南東へ向ってわずかに傾斜している山麓扇状地面に位置している。標高は670m～690m位のうちに含まれる。城郭の形態は扇状地式館城で，雑形連郭式に含まれると思われる。附近には広垣外，金焼場，鍛冶垣外，社宮司，南垣外，金井垣外，町屋，町谷畑，堀等の小字名がみられる。

この城は昭和54年度の発掘調査によって初めて明らかとなった。それによると室町中期から室町後期にかけてが本城の全盛期と思われよう。(註2)

(3)　中村の城（安岡城）

西春近諏訪形にあり，諏訪形会所の北東，堂沢川が形成した低い河岸段丘の突端部に位置している。現在は４～５m位の土塁が構築してあった。近くの住民に聞いたところによると『以前はこの土塁が全周していて，西側に一部切れたところがあり，ここが入口となっていたと，さらに井戸があったらしい事等々』を語ってくれた。

堀は東側と北側（現在は埋っている）にみられ，南側の段丘崖中腹に出郭を構築してある。域郭形態から分類すれば，平山城式館址で，単郭方形に含まれ，安岡城のような築城方法は伊那市内では唯一である。館址の北東の位置に存在している土塁の直下に稲荷社が祭ってある。附近の小字名は，坂ノ下，城坂，屋敷添，城，城の腰，的場，的場垣外，古屋敷，荒神社，中村城の内，北垣外，飛石，清水若宮，若宮，若宮八幡社，弥十垣外，駒垣外，春垣外等である。

(4)　井の久保の城

本報告書の井の久保遺跡が該当する。　　（飯塚政美）

第Ⅲ章　ま　と　め

参考文献

註１　蕗原拾葉（大塔合戦記）中村元恒著（名著出版社復刻）

註２　菖蒲沢・山の下遺跡緊急発掘調査報告書1980年伊那市教育委員会刊
町屋の城は菖蒲沢遺跡が該当する。

図　版

図版一　遺跡全景

遺跡地を東側より眺む

遺跡地を南側より眺む

図版二　遺跡地の現状

表木城の土塁

表木城の堀

表木原遺跡

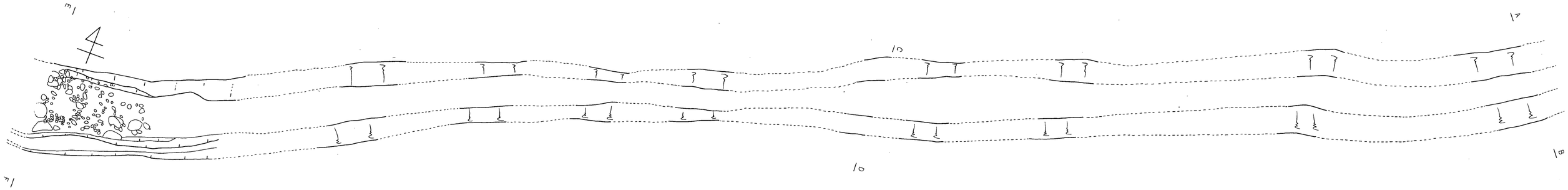
—緊急発掘調査報告—

昭和56年３月17日　印刷

昭和56年３月20日　発行

発行所　**長野県伊那市教育委員会**

印刷所　株式会社　**ぎょうせい**

東京都新宿区西五軒町52

井の久保遺跡　第１号溝状遺構実測図(1：80)